

全国邪馬台国連絡協議会会報 第11号

邪馬台国新聞

発行 2020年10月31日

頒布価格 500円

発行所 全国邪馬台国連絡協議会

発行者 会長 井上修一

〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
浜松町ダイヤビル2F

URL <http://zenyamaren.net>

E-mail: zenyamaren@gmail.com

全国邪馬台国連絡協議会 会員の皆様へ	1
東京支部報告	2
顧問投稿	2
大谷 光男、大平 裕、小田 静夫、島津 義昭、関 裕二、藤盛 紀明、宝賀 寿男、森岡 秀人、安本 美典	
会員投稿	19
飯田 眞理、伊藤 雅文、井上 悦文、神尾 忠和、金田 弘之、竹村 紘一、福島 巖、山田 昌行	
わが図書語る	28
伊藤 雅文	
「安本美典賞」創設のお知らせ	28

全国邪馬台国連絡協議会 会員の皆様へ

全国邪馬台国連絡協議会会長 井上修一



酷暑だった夏が嘘のように過ぎ去って秋色真っ盛りですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？ 酷暑だった分、今年の冬は厳冬になるという話もあります。

健康にはくれぐれもご留意され、元気で乗り切ってくださいようお願い申し上げます。

皆様ご存じの通り、今年はコロナ・ウイルス騒ぎで、日本中いや世界中が未曾有の経済的危急、社会的混迷の中にあります。我が全邪馬連においても予定しておりました講演会やイベントは中止、乃至は延期せざるを得ない状況です。TVの歴史関係番組でも、ゲストは同席せずリモートで参加するといった形態をよく見かけます。しかしそのような中であっても、心ある皆様には、古代史の研究、邪馬台国の探求に勤んでおられる

ことと拝察いたします。

コロナ騒ぎが終息いたしましたら、また皆様と歴史談義に花を咲かせたいものと心待ちにしております。

さて、会では今年から会員証を発行することにいたしました。今年の会費納入者、昨年までの会費納入者で今年の会費納入を失念されておられる方を対象に発行いたしますので、お忘れの方は是非会費納入を宜しく願います。なお来年度からは、6月の総会までに会費納入された方を対象に会員証を発行する予定です。本年度の会員証は、この会報と一緒に別便で11月頃には皆様のお手元へ届くものと存じます。

コロナ騒ぎの影響で、今年は各機関の研究会や発表会、並びに研究機関や行政の発掘作業も殆ど行われておりません。そのため古代史や歴史関係のニュースもあまり目に触れることがなくなっておりますが、これを機にじっくりと古代史の研究に勤しむのも、秋の夜長の過ごし方かもしれません。また、地方においては小規模ながら、各種研究会などが行われているやに聞き及びます。

この騒動が一日も早く終息して、また皆様と歓談できる日が来ることを願っております。

令和二年九月末日

支 部 報 告

東京支部報告

①当支部では本年度の講演会を企画いたしました。

- ・ 7月4日第12回東京大会 日本人はどこから来たか「日本人の源流」
斎藤成也先生(国立遺伝子学研究所教授) 神澤秀明先生(国立科学博物館研究員)による講演会
- ・ 9月4日には会員による研究発表会「会員研究発表会」
新井勝講師、前田豊講師、槌田鉄男講師
- ・ 10月4日には会員による「討論型研究発表会」を企画しメルマガで講演応募し選考も終了しました。
これらすべての講演会はコロナ禍の中、中止をせざるを得ませんでした。
3講演会はすべて延期とし、来年に同講演会を開催する予定です。

②「邪馬台国サロン」の開設

古代史愛好家が毎月昼間に定期的に集まって気楽にお茶を飲みながら懇親、発表、討論できる場を探しておりましたが、この度、新規会員になりました中村伸也様(まほろば東京クリニック院長)のご厚意により懇親できる場所(駒込駅前スペース)をご提供いただきました。

この件につきましてもコロナ禍の状況の中、開催を延期いたしております。
開催できるようになりましたらお知らせいたします。

③東京支部・新年度組織

支部長	内野 勝弘
副支部長(会計監査)	高 取 敦
事務局長	鈴木 圭一
委員(会計)	渡 辺 庸 雄
委員	槌 田 鉄 男
委員	鈴 木 浩 史
委員(メディア)	守 山 敬 之
北海道地区代表	下 枝 広 明

顧 問 投 稿

上宮聖徳太子撰法華経義疏について

二松学舎名誉教授 大谷 光男

平成11年、東京の吉川弘文館から『聖徳太子の誕生』を出版された大山誠一氏が、同出版社の『本郷』21号で、(前略)天平19年(747)になると、突然『三経義疏』も出現し、「上宮聖徳太子撰」とされるが、藤枝晃氏の考証によれば六世紀後半に中国北朝で成立したものである。

このうち『法華経義疏』は、行信(生没年不詳、奈良時代の僧侶)がどこからか探し出したものという。誠に、露骨な行為ではないか。天寿国繡帳が成立するのは、さらにその後で、光明皇后の晩年のことである。

という疑問を投げかけている。

前者の『法華経義疏』は『寧楽遺文』中巻、天平宝字5年(761)10月1日の「法隆寺縁起并資財帳」法隆寺文書を見ると、「法華経疏 肆卷、正本者、帙一枚著牙、律師法師行信覓求奉納者」とあり、さらに、当帳の奥書には、平安時代末の保安2年(1121)に田舎小屋の雑反古から発見され、行信によって法隆寺に改めて奉納されたという。

一方、天平20年6月17日の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」北浦定政手澤本には、「法華経疏参部各4卷」とみえる。同一書であろうか。後帳の冒頭文の「小治田天皇大化3年歳次」は問題があるが。「戊申(648)9月21日己亥」は正しい。前帳の法師行信の履歴は、いま一步不足している。

現存の『法華経義疏』は花山信勝博士によって研究済みの感があるが、なお、梁の武帝の天監年間に光宅寺主であった法雲(467~529)の『法華経義記』8巻の和訳と研究が期待される。理由は聖徳太子の『義疏』の種本となったもので(岩波文庫『法華経』下、坂本幸男・岩本裕訳注の解説)、特に注目されているからである。当然、両書の比較研究が望まれる。梁の文化は百済に大きな影響を与え(武寧王陵に顕著)、その流れが日本に伝来した。

引用文中の後者「天寿国繡帳が成立するのは、さらにその後で、光明皇后(聖武天皇)の晩年のこと」というのは問題がある。当繡帳の「歳在辛巳(621)12月21癸酉」の暦日は、唐の戊寅暦(619~664)であるから、飛鳥時代の作品に相違ない。戊寅暦も当時の日本に伝来(旅行者によって)していたのであろうし、戊寅暦の推歩は、かつて東京天文台の内田正男専任講師に依頼し、協力を得た。改めて感謝申し上げる。

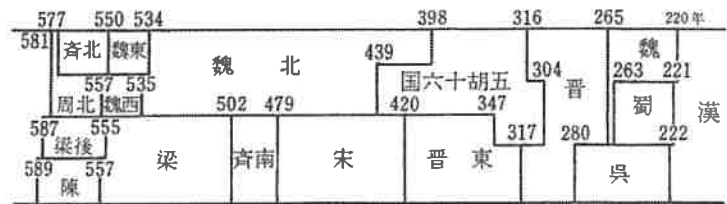
飛鳥京を初めて訪れた大陸王朝の高官

(公)大平正芳記念財団 大平 裕

《隋使の異例の来日》

時は608年のことです。588年、陳を滅ぼして晋以来275年ぶりの大陸統一を果たした隋は、第2代皇帝煬帝(ようだい)が高官の裴世清(はいせいせい)を倭国へ派遣してきました。日本では推古天皇在位の16年目にあたります。通常、皇帝が特使を派遣することは極めて異例なことで、功績のあった夷国の国王への叙勲・弔問、軍事的な出兵や撤兵要求の勅令などの場合と考えられます。608年の倭国へ高官の派遣は、これらの例には当てはまらず、別の事情が隠されていたのではないかと想像されます。

実は大和朝廷は、隋からの特使受け入れに先立って、600年(推古8)と607年(推古15)の2度にわたって遣隋使を出しています。第1回の600年の遣使は、『隋書倭国伝』に記されていますが、『日本書紀』には記録されていません。倭国の使節は初代皇帝(高祖)文帝に接見を許され、倭国の事情を問われ、次の様に答えた様子が伝えられています。



魏晋南北朝王朝交替表

〔隋の高祖文帝の〕開皇二十年(600)、〔時の〕倭王は、姓は阿每(あま)、字(あぎな)は多利思比孤(たりしひこ)であり、〔国では〕阿輩鷄弥(おほきみ)と称しているが、使者を派遣し〔隋の〕朝廷に詣(いた)った。〔文帝は〕所轄官庁(鴻臚寺)に命じて、倭国の風俗を訪ねさせた。使者が言うには、倭王は天を兄とし、太陽を弟としています。〔それで倭王は〕天がまだ明けぬうちに〔王宮に〕出て政事を聴きます。〔その間〕跣(あぐら)をかき不動の姿勢をとっています。太陽が昇ると、あとは弟〔たる太陽〕に委(ゆだ)ねるといってその政事を終えます。〔これを聞いた〕文帝は、
 なんと道理にはずれたことか。
 と言って使者に喩(たと)してこれを改めさせた。

当時は、推古天皇の時代です。天皇の即位は593年、聖徳太子の摂政即位も同じ年でした。早朝、未だ明けやらぬ中、大王(おおきみ)が政務の報告を聴取、夜が明けると共に実務は太子である聖徳太子が執り行ったというところでしょうが、律令制度が既に確立していた隋にとっては、極めて後進的、原始的に思えたのでしょうか。

高祖文帝は、倭国の政治を道理に外れたものと改めるよう、訓令を出したと考えられますが、倭国の使節としては、皇帝の訓令の文書をそのまま、本国に持ち帰るのものはばかられ、朝廷とも内々連絡を取り合い、訓令の文書も、遣使自体も無かったことにしたのではないかと思います。これが『日本書紀』に隋への第一回遣使の記述がなかった理由だと、筆者は考えています。使節の皇帝への奉答が理解されず、帰国を余儀なくされた第1回の遣隋使でしたが、続く第2回目の遣使でも、筆禍事件といった思わぬ事態に見舞われることとなります。

そして第2回目の607年(推古15)の遣使です。『日本書紀』は、「秋七月三日、大礼(らい)〔一二位階の第五、正六位〕小野妹子(いもこ)を大唐(筆者注：隋の間違い)に遣わした」とありますが、『隋書倭国伝』はくわしく、

大業(六〇七)、倭王の多利思比孤が使者を遣わして朝貢してきた。使者が言うには、海西の菩薩の様に慈悲深い天子が、重ねて仏教を興隆されていると聞いた。故に使して朝拝し、かたがた僧侶数十人が来て仏法を学びたい。
 と。〔このとき、その使者が齎(た)した〕国書には、
 太陽が昇る処(東)の天子が、国書を、太陽が沈む処(西)の天子に届ける。無事息災でいられるか云々。
 (注：原文「日出處天子致書日没處天子無恙云云」)

と書かれていた。煬帝(ようだい)はこれを見て不興で、鴻臚寺(こうろじ)(蕃夷の朝貢来聘また交易などを掌る官庁)の長官に、

蛮夷の書であるのに、無礼きわまる。二度と奏聞するでない。
と言った。

と伝えられています。煬帝はこの倭国の国書に対し当然不快であり、今後無礼を改めるようにといった返書をしたためさせ、小野妹子に下げ渡したに違いありません。ところがこの煬帝の国書も(正式には)倭国には届きませんでした。内容は当然叱責と今後改悛を促すもので、内容を知った小野妹子は奇策を考え、帰国途次の紛失、それも百濟人による窃盗によるものと仕立てたのです。小野妹子はこの盗難の経緯を朝堂に報告しましたが、当然百官からは例の無い罪と責められ、流刑の処置が取られたのです。

しかし、内々国書の内容を知らされた天皇と太子は、この国書紛失という大事を隋使に知られてはまずいとも考え小野妹子を許し、更に再び妹子を重用することになります。小野妹子は中国(隋)名「蘇因高(そいんこう)」と言われていますが、中国名を持つ程の人物であり、先の第1回の隋使にも携わっていたのではないかとも思われ、中国通のベテランでした。

さてこの様な状況の中、倭国を蔑んだ筈の煬帝が何故特使を送ることになったのでしょうか。煬帝は激しい怒りが収まるにつれ、①倭国といった遅れた国に教えさとしてやらねばと思いついたのか、②この様な国書を送ってくる倭国の実情を知りたい、倭国の国王に会ってどんな人物なのか使者に確認させたいという興味にかられたのか、などであったのでしょうか。

《裴世清の来日》

裴世清一行(裴世清と下客12名)は、推古16年(608)夏4月、小野妹子に従って百濟を経由、対馬、壱岐を経て筑紫に到着します。朝廷は難波吉士雄成(おなり)を遣わし歓迎しますが、一行は更に瀬戸内海の10数か国を横に見て難波の津にやってきます。難波にはすでに四天王寺が偉容を誇り、大路の整備も進み、街は殷賑を極めていたと想像されます。そして同地には、隋使のために高麗館の横に迎賓館が立てられましたが、到着のこの日、飾り船30艘で江口に迎え、新しい館に案内すると共に、中臣宮地(どころ)連鳥磨呂(おまろ)、大河内(おおしこうち)直糠(あら)手、船史(ふひと)王平を接待役としたとあります。国を挙げての大歓迎でした。

その後一行は、数艘の船に分乗し、大和川を上ってくることになります。丁度奈良盆地全体が見渡せる王子のあたりにきますと、左手に創建されたばかりの法隆寺が望まれます。やがて支流の初瀬川を上り、飛鳥京の入り口海柘榴市(つばきいち)に到着します。この日、朝廷は飾り騎(うま)75匹を遣わし、額田部連比叟夫(ぬかたべのむらじひらぶ)が歓迎の辞をのべたと伝えられています。『日本書紀』は続けます。「一二日、唐客を朝廷に召し、使の旨を奏させた。このとき阿倍鳥臣、物部依網(よさみ)連抱(いだき)の二人を客の導者(みちびきひと)とした。大唐の国の信物(つかいもの)を廷中に置いた。使主(おみ)〔大使〕裴世清(はいせいせい)は、自分で〔天子〕の書物を持ち、二度おじぎをして、使の旨を言上して、立った。その書はいう、『皇帝は倭皇(わおう)〔原文は倭王か〕に問う。使人(つかい)の長吏、大礼〔一二位階の第五〕蘇因高(そいんこう)がやってきて、思いを全くした。朕は、〔天の〕宝命をよろこんで承(う)け、天下を治めている。徳化をひろめ、全人類におよぼそうと思う。愛育の情は、遠くも近くもへだてない。皇(おう)〔=王〕が、海外に独居して、人民を撫(な)で寧(やす)んじ、国内は安楽、風俗は融和し、深い氣〔持〕、至誠で、遠く朝貢を修めたのを知った。丹誠の善を、朕はほめてとらせる。やや暖かである。このごろはいつものようにはかわりはない。鴻臚寺(こうろじ)の掌客(しょうかく)裴世清(はいせいせい)らを遣わして、ようやく往意を宣(の)べる。あわせて物を送ること、別のようである』と。」。

16日に朝堂で饗応、翌9月5日、難波の大郡(おおごおり)〔庁舎〕でもてなし、一行は同月11日帰国の途についたとあります。帰国に際し、天皇は小野妹子臣を大使とし、吉士雄成(おなり)を小使とし、福利を通沢として唐客に副(そ)えて遣わしたとありますが、その際天皇より送辞の言葉が述べられています。「東の天皇が敬(うやま)って西の皇帝に白(もう)しのべます。使人の鴻臚寺の掌客裴世清(はいせいせい)らが来て、久しい思いが、まさに解けました。季秋〔九月〕で寒さに向かっています。尊(あなたさま)はいかがおすごしでしょうか。清くのびのびとおすごしのことと思います。此〔方〕はいつもとかわりません。いま大礼蘇因高、大礼乎那利(おなり)らを遣わし行かせます。謹白、意をつくしません。」とあったと伝えています。上の送辞は実際に読まれたもので、やや唐突にも思われますし、態々東だ西だと述べられているところを見ますと、国内向けの文言ではなかったかと思いますが、如何でしょうか。それはともかく裴世清は倭国の朝野をあげての歓迎を受け、6か月近く旅をして任務を全て果たし、満ち足りての帰国を果たしたものと思われれます。

《『隋書倭国伝』の残してくれたもの》

それは、いわゆる「邪馬台国論争」の解決です。隋の特使裴世清が書き残した筑紫より大和(飛鳥京)への旅

程については、すでに水野祐などが指摘していますが、いわゆる、古代史学界や学者達は馬耳東風で、まともにこの意味するところを採り上げようともしていません。『魏志倭人伝』の伝える筑紫(博多)より邪馬壹(い)までの行路図によれば、博多近郊の不弥(ふみ)の津より南へ水行、合計30日を要しての邪馬壹入りとなります。魏の帯方郡の役人の場合は、伊都国、奴国止まりですので、それ以降の経路・旅程は一切里数を使わず、聞き書きの上、後の大和への方向を45度間違え、南へとしてしまっています。

これに対し『隋書倭国伝』は、

- ①倭国の境域は、東西は徒歩5カ月、南北は徒歩3カ月で、おのおの海に至る。東が高く西が低い地勢で、邪摩堆(やまと)を王都とする。ここが『魏志』『三国志』倭人伝にいう「邪馬臺(やまと)」である。
- ②筑紫国から秦王(しんおう)国(中国人街か?)を過ぎ、それから10余国を経て海岸に到着する。筑紫国から東の諸国は、みな倭国に従属している。

と記録し、念の入ったことに『魏志』のいう王都はここ邪摩堆(やまと)なんだと確認してくれているのです。いわゆる「邪馬台国論争」(北九州説か畿内説か)は、戦後75年も我が国の古代史研究を空回りさせ、研究の前進をはばんできました。その争い、主張の原因が「やまと」への道(方向)なのです。「ヤマタイ」などというヤマト言葉にないオカシナ発音は、いい加減にして正しい道に戻ろうではありませんか。

《『隋書倭国伝』の単純ミス》

『隋書倭国伝』は、倭(国)王を阿毎多利思比孤(あまたりしひこ)、国内では阿輩鷄弥(おほきみ)とっている。また、皇太子は和歌弥多弗利(わかみたふり)と音訳しています。まずオカシイのは、『隋書倭国伝』は、天皇名を推古天皇ではなく、次の代の舒明(息長足日広額=おきながたらしひひろぬか)天皇の名を挙げていることです。また、皇太子の名「和歌弥多弗利」としていることに関して、『東アジア民族史1 正史東夷伝』(平凡社東洋文庫)の訳注者は、門脇貞二『「大化改新」論』を参照して、「和歌」は「若」の意、「みた」は田に美称みをつけたもの、「ふり」は村puliのこと。田村(みたふり)皇子(のちの舒明天皇)のことだろう、と注釈を付しています。

倭国の個人名、特に天皇の和風諡号は長たらしく、近隣諸国にとっても難解で迷惑なものであったものと思われませんが、この場合の鍵となるのは、「足(たらし)」です。

隋は681年建国、588年に全国統一を果たしますが、初代明帝が蓄積した財を息子の煬帝が運河・長城の新增築に費やし、また、無謀と云われた3回に及ぶ高句麗遠征を敢行、国力を急速に失い、人心が離反し、滅亡を早めて行きます。618年隋が滅亡、その後早くも636年魏徴、長孫無忌によって『隋書』が撰上されます。すでに官制が整っていたこと、唐にとっては、隋は親族のような間柄にあったこと、そして隋時代の天下が短かったことで、異例の速さで『隋書』は成立したのです。問題は、これまで唐の人にも知られていなかった倭国についてです。倭国王の名についても、新しい知識で記録したに違いありません。

誰もが忘れがちなのは、隋による国力を挙げての3回にわたる高句麗遠征です。高句麗の南に接する百済と新羅は、毎年のように隋に朝貢にくるのですが、その南の倭国は600年と607年に来たのですが、何を考えているのか、正体が分からない相手でした。煬帝も、高句麗遠征に障害があるとすれば、近隣では倭国以外にありませんでした。冒頭に述べましたように、異例の倭国への特使、派遣のもととなったのかも知れません。

海を渡った壺屋焼「泡盛の道」について

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫

沖縄タイムス社が主催する、沖縄についての研究に業績のあった研究者に贈る「伊波普猷賞」(第36回)を、2008年12月9日に『壺屋焼が語る琉球外史』(同成社)という著書で頂いた。これは沖縄が誇る銘酒「泡盛」が、沖縄本島の壺屋窯で焼かれた甕・壺(沖縄では焼物をヤチムン、甕をカーミと呼ぶ)に入れられ、広く海外に運ばれた歴史を追跡したものである。この研究の端緒は、1972年から実施された東京都文化課の「都内遺跡分布調査」から始まる。都には約1,200キロに及ぶ太平洋南海上に、伊豆・小笠原諸島が分布している。なかでも「小笠原」は戦後長期に亘りアメリカ軍施政下に置かれ、1968年6月26日に返還され東京都に帰属した。直ちに「東洋のガラパゴス」と呼ばれた日本的でない自然環境調査を国が実施したが、都の調査は少し遅れて文化課による「文化財調査」が決定していた。1972年4月に入都した私の初仕事が「都内遺跡分布調査」で、特に伊豆諸島と未だ考古学的調査が行われたことのなかった小笠原諸島を重点的に行うことになり、その準備行に出かけることになった。

1. 謎の「南蛮ガメ」の発見

東京の島嶼部に行くには、竹芝桟橋から伊豆諸島には毎日、小笠原へは週1便の連絡船が運航していた。ところが小笠原には1,000トンの小型連絡船で、5泊(船泊4日、島内1泊)の船旅であった。客船「椿丸」は金曜の

夜10時に出発し、三宅島と八丈島の間を東流する世界最強の黒潮激流(7ノット)を乗り越えて、2日目の午後3時すぎに亜熱帯の小笠原・父島(二見港)に到着した。

返還後まもない小笠原の現状は、戦時中の1944年2月に「全島本土引揚令」が発令され、島民は直ぐに戻れるものと思身回りの持ち物一つで島を離れたが、残念なことに22年10ヵ月という途方もない長い年月帰島出来なかったのである。島内は戦争時の遺構(飛行場、砲台、防空壕、トンネルなど)が多数残り、無人化した旧島民の「集落跡」が時間を止めてジャングルに埋没していた。

本格調査はまず旧島民の「集落跡」の地点確認と、離島時のまま時間が止まった「日常生活用品」類の記録であった。考古学的な遺物としては「陶磁器」があり、その大半は東京地方で「せともの」と呼ばれる、東海地方で焼かれた「瀬戸・美濃焼」類であった。しかしその中には見たこともない特異な「焼締無釉陶器」類があり、母島のサトウキビ製糖施設跡や旧屋敷跡の庭隅などに破片が確認された。さらに驚くことに、村役場の収蔵庫には完形品の「大甕・大壺」が多数保管されていたのである。

一般的に関東地方や伊豆諸島北部に分布する大甕類は、東海地方の「常滑・美濃焼」と呼ばれる大甕や骨壺であるが、小笠原で発見されたこの特異な大甕・壺類は、器形・陶質などが著しく異なっていた。里帰りした古老たちに聞いても、こうした大甕・壺類の由来を正確に知る者はいなかった。ところがその後の調査で、伊豆諸島南部の八丈島でも同様の焼締無釉陶器が多数確認され、島民は「南蛮ガメ」と呼んで「島焼酎」用や「水ガメ」に多用していた。さらに伊豆諸島北部の三宅島、大島にも確認され、東京都の島嶼部に広く分布していることが判明したが、この特異な陶器類の由来などは不明のままであった。

2. 汐留遺跡で「泡盛徳利」出土

1991~93年港区東新橋の「汐留遺跡」の発掘調査で、近世期の「仙台藩伊達家上屋敷跡」から、小笠原・八丈島で謎であった焼締無釉の徳利や甕(南蛮ガメ)が出土した。文献調査でこの陶器類は沖縄県の「壺屋焼」に類似していたことから、沖縄県の関係者らに連絡し資料の「胎土分析」を実施した。その結果「壺屋焼」と判明し、用途は「泡盛酒」を入れた徳利と大カーミであった。

この縁で1996年7月に、都と沖縄県、那覇市の文化財関係者らによる都島嶼部の「壺屋焼」の共同調査が実現された。八丈島での調査では水道が完備されるまでは、こうした大カーミが屋敷の軒下や台所で大切な「水甕」として多用されていた。調査結果は8月6日の地元「南海タイムス」紙に、「水ガメは沖縄の壺屋焼だった」という大見出しで大きく報道された。また嬉しい調査成果として、八丈島の大カーミ1点が地元所有者のご厚意で、故郷の沖縄に里帰りし「那覇市立壺屋焼物博物館」に寄贈され展示された。この明るいニュースも、翌年2月20日に「八丈島から壺屋焼里帰り」というタイトルで「沖縄タイムス」と「琉球新報」の両紙に大きく報じられている。

3. 泡盛はウチナーの宝物

沖縄(ウチナー)では一般に酒のことを「サキ」と総称し、蒸留したサキを「あわもり」と呼んでいる。泡盛の語源の由来には、原料に最初「粟」を使用したという説、醸造時に「泡」が盛り上がるからとする説、薩摩が九州の焼酎と区別して命名したとする説、古代インド語で酒を「アワムリ」といったとする説などが知られている。泡盛の起源については、中世のアラビアから「蒸留技術」が東南アジアのシャム(現在のタイ)に伝わり「ラオロン酒」になり、15世紀にこの蒸留酒が交易活動で琉球に伝わり「泡盛」が誕生したとされる。

泡盛は世界に誇れる銘(名)酒で、世界で唯一の「黒麹菌」を使用して、このサキに一番適した「タイ米」を使った「蒸留酒」である。泡盛は「壺屋焼荒焼大カーミ」内で保存され何年物と自慢される「古酒」(コース)が最も美味とされる。これはこの荒焼(アラヤチ)と呼ばれる焼締陶器が、泡盛の保存において、適度な温度調節、アルコール分の自然蒸発、また素焼き陶器が醸し出す独特の成分などが幾つもの相乗効果のハーモニーによって、類まれな芳香とまるやかな舌ざわりが生まれ、時間の経過とともに芳醇としてくるのである。一般には3年以上アラヤチ内で寝かせたものを「コース」(古酒)と呼んでいるつまり、泡盛と壺屋焼、荒焼カーミは、お互いに切り離すことができない一体物として歩んできた歴史がある。

その後、沖縄での調査の折々に宮古島では泡盛の「オトーリ」を経験し、波照間島ではまぼろしの泡盛と名声の高い「泡波」を每晚賞味した。さらに沖縄本島では各種の「コース」を十二分に愛飲し、ウチナーの「サキの心」に少し触れた思い出で嬉しかった。ちなみに我が家にも「伊波普猷賞」の受賞時に頂いた泡盛が、12年物の「コース」となって現在「ウチナーの宝物」として大切に保存している。

4. 世界のウチナーンチュの軌跡

泡盛を入れた「壺屋焼大カーミ」や「徳利」は、遠くウチナーを離れてどのような歴史を辿ったのであろうか。近世期には、琉球王国は薩摩藩との関係で「江戸上り」と呼ばれる将軍家への慶賀と謝恩の行事を行っていた。この琉球から江戸までの一年余りの行程で、幕府や大名家に贈答する琉球特産品に泡盛が入った大カーミや徳利

類があった。当時、日本文化が確立した室町時代以降、日本では「南蛮・島物」を大切に作る習慣があり、こうした焼物は飲用後も捨てられず空容器が近世の諸大名や茶人などに珍しい物、高価な物として珍重された。博多や堺の商人達は琉球から直接入手して、上流階級に高価で売りつけていた可能性も指摘されている。この壺屋焼の「素焼焼締陶器」も南蛮・島物に入り、泡盛飲酒後もこうした大カーミは二次使用され、徳利は大切に宝物庫に収蔵されている。

島嶼部の大カーミは、沖縄県人(ウチナーンチュ)の広範な渡島活動の軌跡と考えられる。小笠原は明治期には八丈島民が多数移住して農業や開発に従事していた。小笠原は沖縄と同じ亜熱帯気候であったことから、八丈島民に続いて多くのウチナーンチュが移住し、明治後期には沖縄那覇港から「糸満遠洋漁業株式会社」が移設され、遠くハワイ、オーストラリア、フィリピンまでを舞台に漁業活動をしていた。大正期の小笠原は水産業が充実した時期で、糸満系漁民が丸木舟の「サバニ」に乗って、本州島の太平洋沿岸地域や伊豆・小笠原諸島で「沖縄式追込漁法」を行った。またサトウキビ農業移住者が、横浜 → 八丈島 → 小笠原 → 内南洋航路や那覇港から直接サイパンにも大量に移住した。こうして小笠原には、多くの八丈島民や沖縄県人が生活していた。大正6年7月16日刊の「萬朝報」に興味ある記事が載っている。それによるとウチナーンチュは年の祝日(旧暦5月4・5日、新暦6月22・23日)に爬龍舟の競漕をして、夕方からは盛んに泡盛酒を酌み交わし、酔いがまわると得意の踊りを始めたとある。この泡盛は自分たち用として沖縄から大量に壺屋焼大カーミで移入し、酒宴後は水ガメや穀物入れなどに二次使用されていた。八丈島の古老によると、大正期には沖縄の人も生活していて、こうした南蛮ガメを「あわもりガメ」「さけガメ」と呼んでいたという。明治9年横浜から八丈島経由で小笠原までの連絡船が運航し、八丈島で下船した沖縄県人が自家用の酒分として泡盛を持ち込み、その空大カーミが水不足の島の大切な水ガメとして重宝に使用されていた。つまりウチナーンチュが移住した、伊豆諸島の大島、三宅島、八丈島、小笠原諸島の父島、母島、北硫黄島、マリアナ諸島のサイパン、ティニアン、アギハン島などに多くの壺屋焼荒焼大カーミが残され、世界に活躍したウチナーンチュの軌跡の証左でもある。

最後に

48年前に初めて東京の南の島々で出会った「壺屋焼大カーミ」が発端になって、20年後の都心の汐留遺跡の発掘調査で出土した「壺屋焼徳利」で本格的な研究に進展し、それらの資料の理化学的分析によって壺屋焼陶器の実態が把握され、その成果として近世及び近代期にウチナーを離れて広大な黒潮圏に活躍した「ウチナーンチュの軌跡」を辿った私の「泡盛の旅」も、ここでやっと一休みが出来そうである。次のテーマは、泡盛というお酒と肉料理で大変相性が良い、沖縄のブランドブタ「アグー」の歴史について、『アグーが語る琉球史』という単行本を出版できればと思っております。

阿蘇山信仰の黎明期

肥後考古学会 島津 義昭

阿蘇地方の人間の歴史は旧石器時代から始まる。最古の遺跡は下城遺跡(小国町)で2万4千年前である。その後、縄文時代・弥生時代を経て日本列島各地に巨大な古墳が造られる時代、古墳時代となる。この時期は弥生時代が終わる3世紀のある時点から厚葬が禁止された「大化の改新」までの、およそ400年間である。阿蘇山に対する信仰や阿蘇文化の基礎はこの時代につくられた。

阿蘇山についての考古資料 國造神社の近くに二つの古墳がある。上にある上御倉(かみのみくら)古墳の蓋石には(阿蘇)山の装飾があった。上御倉古墳は6世紀築造の円墳で径33m、安山岩と凝灰岩を使用した巨大な石室がある。石室は巨石を使った奥室・前室と羨道からなる複室墳で、装飾は前室を塞ぐ蓋石にみられた。その形状は高さ1.5m、幅0.8m程の四角形の切石に、白で山の形、その下に黄色で人物像が描かれていた。惜しくも調査後にこの石は行方不明となっている。将来の再発見を待たれる。阿蘇國造夫婦の墓と伝承されている。

阿蘇山に対する中国書誌 中国文献では唐の魏徵・長孫無忌が貞観10年(636)に編んだ『隋書(倭国伝)』に阿蘇山の名がみえる。日中を通じ阿蘇山の最初の登場である

有阿蘇山其石無故火接天物俗以為異因行禱祭有如意寶珠其色青大如鷄卵夜則光有云魚眼精也

この記事は、後世の中国の著作物に大きな影響を与えた。明の官僚で学者でもあった馮應京が万暦年間(1573～1620)に著した『月令廣義』は中国の伝統的な年中行事・儀式などの解説本である。ここには以下のように阿蘇山を「壽安鎮國山」としたことが記される。

日本國阿蘇山石火起接天俗異而禱之大永樂初年封為壽安鎮國山如鷄卵夜則光永樂初年封為壽安鎮國山

明・永樂帝が外蕃諸国の山を祀り「封山の典」を行ったのである。永樂4年(1406)には壱岐・対馬の海寇退治に功のあった源氏道義(足利義満)に対し褒美の品を与え、日本の山に壽安鎮國山の称号を与え自筆の碑を建立したのである(『大明太宗実録・卷50』)。また同じ頃(1583年)に成った『殊域周咨録(卷3 東夷日本国)』では

次のように記す。

其山曰壽安鎮國永樂御制碑文具前曰阿蘇山石無故火起接天俗以為異因行禱有如意宝珠大如鷄卵其色青夜則有光

この両書は上述の『隋書』の記事を踏まえ永樂帝碑文を阿蘇山と判断した。広く中国文献の取集し解題を行った松下見林『異称日本傳』(元禄元年・1688)で、上記の記事を次のように解釈した。

今按阿蘇山事見隋書壽安鎮國山事見大明一統志而記封何山以此號今拋月命廣義即封阿蘇山以此號也

永樂帝毫筆の碑については、わが国でも広く知られ江戸時代から関心が持たれていた。壽安鎮國山の石碑建立地を阿蘇山としない説もある。決定的な証拠は得られていないものの、古くから中国で知られていた点を考慮すると阿蘇山の可能性は高い。

阿蘇についての日本古典 『風土記』は和銅6年(713)の詔で編述された。その逸文には阿蘇についての伝承が登場する。

肥後國風土記曰 昔者纏向日代宮御宇天皇 發玉名郡長渚濱幸於此郡 徘徊四望 原野曠遠 不見人物 即歎曰 此國有人乎 時有二神化 而爲人曰 吾二神阿蘇都彦 阿蘇都媛 見在此國 何無人乎 既而忽然不見 因號阿蘇郡 斯其緣也 二神之社 見在郡以東云々

これは『阿蘇文書(大日本古文書 阿蘇文書之二 元應元年十一月十五日)』に残されたものである。同様の記事は『日本書紀(巻七・景行天皇)』にもみられる。

文意は「この国に人ありや」という問いに対して、二神が人の姿で現れ阿蘇都彦・阿蘇都媛と名乗り「何見人物なぞひとなからめや」といい姿を消した。この文の解釈として万葉集ではナはアであるので、ナゾをアソとし、この地を「あそ阿蘇」としたという。ただし、この解釈は当たらないとの説もある。この話では、登場する二神名を単に男・女を彦と媛(姫)を言っているに過ぎないが、地名が先にあつてそれを神名にしたのであろう。

また、鎌倉時代後期に成った卜部兼方の『釋日本紀』では、筑後風土記の逸文を紹介して阿蘇山(關宗岳)について記す。

筑紫風土記曰 肥後國 關宗縣 縣坤廿餘里 有一禿山 曰關宗岳 頂有靈沼 石壁為垣 計可縱五十丈、横百丈、深或廿丈或十五丈 清潭百尋 鋪白綠而為質 彩浪五色 絙黃金以分間 天下靈奇出茲華矣 時時水滿 從南溢流 入于白川 衆魚醉死 土人號曰苦水 其岳之為勢也 中天而傑 峙 包四縣而開基 觸石興雲 為五岳之最首 濫觴分水 寔群川之巨源 大德巍々 諒人間之有一 奇形杳々 伊天下之無雙 居在地心 故曰中岳 所謂關宗神宮是也

ここでは、阿蘇山(關宗岳)に靈沼(噴火口)があり、その水は奇しきもので華を出すという。この華はおそらく硫黄であろう。そこから流れる水を、地元民は「苦水にがみず」といい河川に流れ出し魚類が死ぬこと、その場所は国の中心であるため中岳と呼ばれ、關宗神宮がこれであるとしている。つまり噴火口自体を神宮としていたのである。

阿蘇山中岳の噴火口は、平安時代には「神靈池」と呼ばれたが、神佛習合の機運が高まると佛教徒は、それを「竇池」と称した。その枯渇に対し異変を予知するものとして注意が払われた。阿蘇山異変の、最も古い記事は『日本後紀』延暦15年(796)である。

大宰府言 肥後國阿蘇郡山上有沼 其名曰神靈池 水旱經年 未嘗増減 而今無故涸 減二十餘丈考之于筮 事主旱疫。

この神靈池の異常を大宰府(を通し朝廷)に奏上したのが阿蘇氏である。『続日本後記』承和7年(840)では、神靈池は「健磐龍命神靈池」と記されており、ここに健磐龍命の名が初めて登場する。

『日本三代實録』貞観6年(865)には、「健磐龍命」は正二位勲五等に叙位された。同時に「比賣神嶺」に三石神があり、そのうち二石が崩壊したことが記されている。「健磐龍命」との神名は健と磐龍が合体したものである。健は「猛(たけ)し」で、磐龍は磐立つとの意さらに靈池に住むとされる龍を名前にみためたものであろう。中世、阿蘇修驗と関連を持った英彦山の縁起(『彦山流記』建保年間か)には木練上人が九州斗薨の折、阿蘇峰に登山して八功德水で修行をしていると鳥や小龍、十一面観音などの他、九頭八面大龍が出現したとある。後世の絵画資料にも、池から立ち昇る噴煙を龍として描いたものもある。

神靈池は特殊な池と認識されていた。池についての古代人の観念のうち、一般的な水源に対する敬意のほか、阿蘇神靈池はそれ自体が増減するという神秘力が畏敬の根源であった。このような阿蘇山神靈池の異変が大宰府を通じ中央に奏上された結果、そのたびごと阿蘇神の位は向上し、封戸(神戸)が寄進された。承知10年(843)に健磐龍命神社の神主は笏を持つことを許された。これは健磐龍命神社の神職が国家的地位を占めたことを意味する。

阿蘇社の成立 承知14年(847)には國造神社が官社となり、貞観元年(859)には阿蘇比咩神社が官社となった。

これらの阿蘇の社は延喜式(卷十 神祇十 神名下)に登場する。

肥後國四座大一座 小三座

阿蘇郡三座大一座 小二座 健磐龍命神社名神大 阿蘇比咩神社 國造神社

玉名郡一座小 疋野神社

肥後國四座のうち、三座を阿蘇郡内の社が占める。しかも健磐龍命神社は官社のうちで、律令国家が緊急時に対応する名神であった。延喜式の編集は曲折を経て延喜5年(927)に奏上された。延喜式に記す神社(かみのやしる)の所在地はどこであろうか。阿蘇神社は『日本書紀』卷第二十八、天武天皇十年(681)一月己丑(十九日)、天社地社の神宮を修理(をさめつく)らしむ、との詔の対象となったと思う。爾来、律令国家を支える宮として宮地にあり、國造神社も所在地は現在地であろう。

古代の阿蘇社や郡家の場所については、それを直接に示す史料はないが手がかりはある。先に紹介した『筑前風土記』では肥後國關宗縣縣坤廿餘里有禿山曰關宗岳と記す。これからみれば、阿蘇縣の縣(郡家)の坤(南西)の20余里に阿蘇山があるというので、逆に阿蘇山から見て艮(北東)の方向に郡家はあることになる。当時1里は三百歩でおおよそ540m、したがって阿蘇山から北東約10kmの所に郡家はあることになる。阿蘇郡家は大字・役犬原の小字・「大正院」に想定される。この郡家と阿蘇社の関係は『肥後國風土記』(大日本古文書・阿蘇文書之二・元應元年十一月十五日・阿蘇社條條注記寫)によれば「二神之社見在郡以東」であり、風土記の他の事例と同様、文中の郡(こほり)とは郡家を示すものであろう。つまり郡家から東に、二神(阿蘇都彦・阿蘇都媛)の社はあったことになり、これは今日の阿蘇社の場所と合致する。少なくとも風土記の書かれた時期には、現在地に阿蘇社は存在していたとみられる(社の構成は現在とは異なる)。また古典籍の記載からみて、阿蘇社(健磐龍命神社・阿蘇比咩神社)の位置は、古来より山頂(噴火口)とカルデラ内の二箇所にあったと解釈できる。

それらの社の設置時期を特定する方法はないであろうか。國造神社については、その周辺に有力な古墳が分布し、それらを見渡せる谷の奥に社はある。「國造」は大化改新前の首長であり、その後には律令初期の祭祀・神事を担当(天武天皇十二年正月詔)した。國造神社は、土地の首長を農業神として古くから祀られたものであるのがわかる。一方、阿蘇山の神を崇めていた阿蘇君は『古事記』にも神八井命の子として登場している。その系譜を祀る健磐龍命神社に封戸(神戸)が給されるに及び、健磐龍神 — 國造速瓶玉命 — 阿蘇氏という系譜が成立したとみられる。國造にみられる開拓神つまり農業神と健磐龍命・阿蘇比咩の山岳神(火山神)の性格を異にする二つの社が、同一の由来(系譜)を持つ神として祀られるようになったのであろう。

阿蘇谷の東部の開発は早く、一の宮町地区(宮地・坂梨・中通・手野・三野)には、条里制が施行された。条里由来の地名は小字名に残っていて、東部を起点に一条から五条が復元される。カルデラ内の阿蘇社は、復元条里の五条に位置する。阿蘇社の平面的な配置(東を正面として南北に配列)については、その理由がいろいろ推定されてきた。おそらく条里の地割方向に規制され、今日の南北配置になったのであろう。阿蘇谷の条里制の実施時期は特定できないが、律令体制が普及した奈良時代以降であろう。カルデラ内の阿蘇社の上限時期を推定できる。阿蘇神社(健磐龍命神社・阿蘇比咩神社)の成立は遅くとも8世紀、奈良時代と考える。後世の拝殿建築のような、祭祀者が家屋に入るようになるのは、平安時代以降であろう。

比賣神嶺と神靈池 神靈池(噴火口)と阿蘇君の関連はまず阿蘇山自体を阿蘇の氏の神とする信仰が根底にあり、そのためにそれは祖先神と考えられてきたのであろう。阿蘇君はこの地の豪族として発展し、國造であった。また同時に阿蘇氏は阿蘇山の祭祀を司る神職も兼任したとみられる。

ところで、古文獻にみられる神は、噴火口(神靈池)自体であった。さらに『日本三代實錄』貞観6年(865)には「比賣神嶺」に三石神があり、その二石が崩壊したことを記す。

又比賣神嶺 元來有三石神 高四許丈 同夜二石神禿頁崩

この比賣神嶺を高岳とし、そこにあった岩とする見解もあるが、やはり神靈池である噴火口の東の嶺の一角とすべきであろう。

石神(いわがみ)は人口的に造り出された石や、自然の石を神の姿として祭祀の対象とするもので、1個の孤立した石のほか岩群の中で目立った石の場合もある「比賣神嶺」の三石神は后者であり、それは実存したものであろう。

神靈池である火口を詳しくみてみよう。現在の中岳中央火口は三重の構造を持ち、古い順に「古期山体」「新期山体」「最新期火災丘」と呼ばれている。「最新期火災丘」の年代は約6300年前に噴火した鬼界アカホヤ火山灰よりあたらしく、噴出年代は4000年から5000年前と推定される。現在の中岳噴火口は7箇所がみられる。熊本測候所では北から順に1・2・3、南の3つ火口には東から6・4・7・5の番号を付けている。今日湯たまりをみることのできるのは第1火口で、盛んに噴火を繰り返している。これらの火口の東壁はアグルチネート(岩滓集塊岩)による垂直の柱状の崖をなす。その色は茶赤色から黄褐色で、見る者に極めて強い神秘感を与える。西

の火口壁からはアグルチネートが柱状をなし、それが火口に崩落した姿を遠望できる。そのうちの三石が『日本三代實録』にいう比賣神嶺の三石神であろう。比賣神嶺とよばれたのは、火口西からみた中岳噴火口の東縁の北側高所であると考えられる。

火口については「阿蘇山舊記抜書」の記述が注目される。史料自体は江戸時代のものだが、内容は古い伝承を反映しているとおもう。火口を中・北・法施崎と区分しているのが興味ふかい。

阿蘇山上宮三寶池本迹之事

中ノ御池 本地十一面觀世音菩薩、垂迹健磐龍命大明神、此龍命ハ者、神武天王皇子神八井耳命ノ御子ニシテ阿蘇都彦是也、

北ノ御池 本地弥勒菩薩、垂迹比咩明神、此比咩明神者、健磐龍命ノ神后ニシテ阿蘇都媛是也、

法施崎 本地毘沙門天王、垂迹彦御子明神、此神者健磐龍命之孫子也、

ここで、語られているのは本地垂迹での佛と神の対応である。ところで、ここでいう中ノ御池、北ノ御池、法施崎は、現在のどの火口を指すのであろうか。北ノ御池と中ノ御池は、前者が第1・2火口、後者が第3火口であろう。法施崎とは第3火口を望む西側火口壁である。今日では第1火口が火山活動活動の中心である(図参照)。

本地垂迹の確立した平安時代半ばには中ノ御池(第3火口)の噴火活動が盛んであり、火山活動の中心であり。今日盛んに活動を見せる北ノ御池(第1・2火口)はそれに続くものであったとみられる。

阿蘇山の噴火活動の多寡は時代により差があった。

噴火口の移動があったことは近年の観察でも知られている。少なくとも過去60年間の綿密な観察によりその事実は裏付けられた。阿蘇の歴史は、まだまだ未解決の事柄が多い。さらに関心を深めていかなければならない。



図 阿蘇山噴火口(国土地理院・火山地図)

なぜ魏の使者は前をゆく人の背中が見えない藪を歩かされたのか

歴史作家 関 裕二

全国邪馬台国連絡協議会会員の酒井正士氏の『邪馬台国は別府温泉だった!』(小学館新書)を拝読した。

魏の使者は対馬、壱岐を経由して、玄界灘を東南に向かい、糸島市や福岡市周辺に立ち寄らず、洞海湾に上陸していたという斬新なアイデアだ。

根拠はいくつもあると言う。

まず、狗邪韓国から対馬までの距離が千余里で、対馬から壱岐までも同じ千余里、壱岐から最初の九州島の上陸地・末盧国(東松浦半島?)の距離も千余里となっている。ところが実際の地図を見ると、壱岐と東松浦半島(末盧国?)の距離が異常に短い。そこで、壱岐から千余里にあてはまる場所をコンパスで探れば、西側なら五島列島や佐世保、東に伸ばせば、宗像市神湊付近がふさわしいことになる。

もうひとつ、末盧国から東南の位置に伊都国があったと「魏志倭人伝」は記しているが、これまで考えられてきた末盧国=東松浦半島・唐津市付近から伊都国(これまでの常識に従えば、糸島市付近)の実際の方位は、ほぼ「東」で、「魏志倭人伝」の言う「東南」は、不正確だ。

さらに酒井氏は、通説どおり一行が東松浦半島に上陸して陸路で糸島市付近に向かったとすると、苦勞したと指摘している。当時の海面は高く、海岸線を歩くことが出来なかった。そこで、標高差三六〇メートルの峠を越えなければならず、それなら、上陸せず、直接糸島市付近に船で向かっただろうという。つまり、「魏志倭人伝」の記事から割り出せる「末盧国」は、東松浦半島付近ではなく、もっと別の場所で、具体的には東の洞海湾付近だったという。ここに上陸して歩き始めたというのである。

なるほど、斬新な指摘だと思うし、大きな刺激を受けた。ただし、酒井正士氏のいうように、邪馬台国は別府温泉だったかという、にわかに支持するわけにはいかないし、「末盧国は東松浦半島」「伊都国は糸島市」という通説は、くつがえらないと思う。東松浦半島から東南に伊都国があったという説明も、一般にいられているように、「東南に歩き始めた」で良いと思う。奴国も、常識通り、福岡市周辺で間違いない(詳述は避ける)。

その一方で、酒井氏の指摘の中で改めて気付かされたのは、末盧国から使者が歩かされていること、しかも、「魏志倭人伝」は、「前を行く人の背中が見えなくなるほど」だったといっていることだ。なぜこの一節を、もっと問題視しなかったのだろうか。

邪馬台国から朝鮮半島に続く道は、流通と外交のメインストリートだ。この道を、人々が行き来し、交易を支えたはずだ。北部九州に大量の鉄器がもたらされたことは、改めて述べるまでもない。それにもかかわらず、そ

のメインストリートがブッシュ(藪)だったとは、どういうことなのだろう。この道は、本来の道ではなかったのではあるまいか。ここに、邪馬台国をめぐる大きな秘密が隠されていたのである。

無視できないのは、邪馬台国の時代の伊都国と奴国の「ライバル関係」だ。弥生時代後期に交易によって富を蓄えた二つの国だったが、最終的に奴国は没落していく。しかもその間、奴国は東の勢力と手を組んだ気配がある。伊都国と覇権を争っていたからだろう。この推理を、ヤマト建国の考古学が、後押ししている。

三世紀初頭、纏向(奈良県桜井市の三輪山麓の扇状地)に、九州をのぞく諸勢力が突然結集して一大勢力を生み出していた。そして、このヤマトに集まってきた諸勢力は北部九州に押し寄せ、奴国を拠点にしていたことがわかってきた。纏向で誕生した古いタイプの前方後円墳も、北部九州沿岸部に広まっていく。この時、前方後円墳の空白地帯になったのは、福岡県久留米市やみやま市の周辺で、いわゆる邪馬台国北部九州説の最有力候補地だった。ちなみに、みやま市は、古くは「山門 [やまと]」と呼ばれていた地域だ。

本居宣長は「邪馬台国偽僭説」を唱えていて、九州の邪馬台国の卑弥呼は、「われわれがヤマト」と偽って魏に報告したというのだ。つまり、ヤマトの王家(天皇家の祖。纏向政権ということになる)になりすましてしまったというのである。これは、画期的なアイデアだったと思うし、考古学の示す、三世紀の北部九州の置かれた意味を、明確にしている。弥生時代後期、本来なら、優位な立場にあった北部九州勢力だったが、三世紀に入って出雲や吉備が纏向側に靡いたことで、形勢は逆転し、ピンチに立たされたのだろう。日本列島を代表する最大の国(連合体。政権)は、すでに、「ヤマト(纏向)」となっていた。だから、奴国王を中心とする沿岸部の首長たちは纏向政権に靡き(畿内の勢力を受け入れ)、逆に内陸部の国々はヤマトの圧力に抵抗し、「われわれこそ倭を代表するヤマト=邪馬台国」と偽り、外交戦に活路を見出そうとしたのだろう。いち早く朝貢し、親魏倭王の称号を獲得してしまったのだろう。虎の威を借りた生き残り策であった。そして、この「窮鼠猫を噛む作戦」に、隠密裏に協力したのは、奴国のライバル・伊都国だろう。だから、「魏志倭人伝」の奴国の記事はきわめて貧弱で、対照的に伊都国は「一大率を置く」と、北部九州沿岸部の覇者のように描かれたわけだ。

この推理を当てはめれば、「なぜ藪を魏の使者は歩かされたのか」の疑問も解けてくる。「にせのヤマト(邪馬台国)の卑弥呼」は魏に使者を送り、うまく魏をだますことに成功した。ただし、魏の使者を迎え入れるに際し、「ヤマトの犬(邪馬台国からみれば)=奴国の領域」を通ることは出来なかった。海上で邪魔されることもあっただろうからだ。

ちなみに、奴国の阿曇氏は日本を代表する海人であり、南西諸島や日本海広域にわたる海人のネットワークを掌握していたはずだ。とすれば、極力奴国の手の届かない場所を選んで、極秘裏に、魏との交渉を進めなければならなかった。また、魏の使者に、「九州の邪馬台国は、日本の中心勢力ではない(東にもっと大きな連合体が存在する)」ことを、悟られてはならない。そこで東松浦半島に上陸した一行は、普段誰も通らない陸路に案内され、獣道よりもたちの悪いブッシュを進まざるを得なかったのだろう。

ならばこのあと、邪馬台国とヤマトの間で、どのような駆け引きがあったのか、誰が勝利したのかに関しては、別稿で改めて私見を述べたい。酒井氏の指摘から、こちらが新たなアイデアをいただいたという話。

歴史の視点から学ぶこと

NPO 国際建設技術情報研究所 理事長・秋田大学 客員教授 藤盛 紀明

昨年12月末に秋田県大館市と山梨県中央市の交流講演会IN東京「源義光とその子孫」が開催された。この講演会での基調講演者の講演内容と以前筆者が秋田県大館市で講演した内容(歴史の解釈など)には大きな隔たりがあった。歴史は語る人の視点によって、同じ事件・同じ人物の評価が大きく変わることを実感した。ビジネスの多くの分野においても、人々の立場や視点によって理解の仕方は大きく異なる。歴史を学ぶ事の一つの意義は「温故知新」と言われている。歴史解釈の在り方を参考にすれば、現在の生き方の参考になるのではないかと考える。

交流講演会の主催は北東北歴史懇話会(筆者が会長)、両市が共催し、首都圏の多くの歴史団体(当協議会も)が後援した。秋田県大館市の江戸時代の支配者は常陸から移動させられた佐竹氏だが、それ以前の支配者は平安時代以来、甲斐源氏の浅利氏であった。浅利氏の本拠地は甲斐の八代郡浅利郷(現在の山梨県中央市)で、浅利氏の祖の浅利与一は源頼朝の平泉藤原氏との戦い(奥州合戦)で活躍し、比内(現在の秋田県大館市)の地頭職を与えられたと言われている(我が家はその家来)。浅利氏の祖先は源義光で、義光の子孫には佐竹氏、武田氏(信玄が有名)、小笠原氏(礼儀作法などの小笠原流で知られる)、陸奥(岩手)の南部氏など多彩である。義光には兄が二人(他に僧になった兄がいる)いて、長男は義家でその四代後が頼朝。次男は義国でその子孫には足利氏、新田氏がいる。義光以外の源氏一族は家系が途絶えるか余り榮えず、義光の子孫が源氏では最も榮えた一族である。

交流講演会の基調講演をされた東京大学名誉教授の五味文彦氏は源義光について以下のように語った。1) 都で左兵衛尉に任官していたが、後三年合戦(出羽・陸奥を支配する清原一族の内紛に源義家が介入した合戦。結果として平泉の藤原政権が出来る)で兄義家が苦戦していると聞いて、院に暇を申し出たが許されず、官を辞して陸奥の国に向かった(大変な兄思いであった)。2) 合戦で金沢柵に立てこもった清原武衡は食料が尽きて降伏・助命を申し出た。義光は許すように兄義家に進言したが、義家は許さず斬首した(義光は優しい人物だった)。3) 義光は笙の名手で笙を代々伝える豊原家の時元を師とした。時元の子の時秋は父から伝えられなかった曲を義光から学ぶために京から追いかけて、近江の花田で追いつき、足柄峠に差し掛かった時にその曲を伝えて貰った。兄の義家は武芸の人だったが義光は芸能の人だった。筆者の講演は以下に記すように五味講演とは大きく異なっていた。1) 義光が後三年合戦にかけつけたのは兄弟愛からではなく、奥州における私勢拡大、義光からの事後の庇護・支援の期待。2) 義光は滋賀県大津市に三井寺(園城寺)の新羅善神堂(新羅明神)で元服、新羅三郎義光と称し、ここを拠点に活動した。ここを結末点として東海道、東山道、北陸道に多くの所領を配置し、琵琶湖の海運も監視し、都に入る情報・各地の情報を把握してスパイ網を確立した。3) 鎌倉幕府成立以前からの河内源氏の拠点であった鎌倉をはじめ、河内源氏の各地の拠点の管理経営を行い、財力・軍事力を蓄えた。4) 義光の能力の重要な点は「戦略力」である。筆者の分析・解釈であるが、この時代の武士の「戦略力」とは“情報力、スパイ活動、調略、だまし討ち、クーデター、暗殺、警護、非情・冷徹・リアリズム”である。茨木大学高橋修教授は「義光の役割は暗殺や脅迫といった河内源氏の闇の部分を担当」としている。具体的事例として「兄義家の嫡男義忠を子飼いの郎党に命じて暗殺させ、その子飼いの郎党を落とし穴に落とし生かすに口封じした。更に義忠暗殺の罪を次兄義国親子にかぶせて抹殺した」としている。凄まじい話であるが、この時代は兄弟でも生きるか死ぬかの戦いの時代である。五味先生の視点と筆者(高橋修教授)の視点は両者とも正しく、義光には両面があり、視点によって見え方が異なる言うことと考える。

同様のことは現代社会にも多く存在する。今やGAFAsは世界を席卷し、過去の国境を争う領土戦争から国境のない仮想空間で覇(プラットフォーム争奪戦)を競いあっている。その巨人GAFAsについても陰の風評が漂っている。例えば技術的強力競争相手が出現すると巨額の金を払ってM&Aし、その芽を摘んでしまう。時には巨大資金力を駆使して超安値攻勢をかけて相手を消滅させる。例えばマイクロソフトを創設したビルゲイツは先行するブラウザ(インターネット閲覧ソフト)であるネットスケープ・ナビゲーターを潰すために、自社のブラウザ=インターネット・エクスプローラを無償配布し、更にパソコンメーカーにはネットスケープ・ナビゲーターを搭載した場合にはパソコン開発情報を与えないと脅かすとされている。ネットスケープ社はマイクロソフト社と共謀したAOL社にM&Aされ、無くなってしまった。2017~2019年の3年間でGAFAsはハイテク企業200社をM&Aし、米国では次代を支える有望企業は見当たらなくなったと言う新聞論評もある。しかしながら、企業発展ではM&Aは重要な手段であり、競争相手との戦いでは価格競争も重要手段である。巨大IT企業への批判は一方的な見方で、正常な企業戦略とも考えられる。

最初に記した五味先生の講演では歴史の時代区分を変えれば、見えるものが異なってくると言うのがあった。日本の本州部分の歴史時代区分では旧石器・縄文・弥生~鎌倉・室町・安土桃山・江戸と言うのが教科書的な時代区分である。五味先生はこの区分を忘れて100年刻みで区分するとどうなるかを示された。後三条天皇が即位し(1068)院政の布石が打たれ、源氏が東北に関与した前九年合戦(1051~1062)、義光が活躍した後三年合戦(1083)の時代は「家」を大事にした時代、平清盛が太政大臣に就任し武家政権が始まった時代(1167)は先ず行動を第一とする「身体」の時代と話された。視点を変えると異なった事象・未来が見えてくる。現在は変化が激しく、予測の困難な時代である。従来の延長上の視野と異なる視点で考えることも重要である。

トヨタの豊田社長は「スマートシティー・コネクテッドシティー」を静岡県裾野市に来年着工すると米国ラスベガスで発表した。自動運転車・住宅設備・ロボットをIoTで結ぶ都市で業界を超えた連携を行うと言う。筆者は建築専門誌で「フレイル対応長寿健康タウン構想」を提示した。未来の住宅・工場・街・都市空間・IT空間を異なる視点で検討するとによって新しい戦略が想像されると考える。豊田社長はIoT・AI・ロボット・自動運転などの科学技術進歩にトヨタがどのように対応するかを語っているが、興味深いのはトヨタが目指す未来モビリティ社会は「人のぬくもりや優しさを感じられる社会」としていることである。「クルマの誕生で1500万頭の馬が1500万台のクルマに置きかわったが、それでも競走馬は残った。馬は人間と心を通わせることができる。クルマも人と心を通わせる存在になる時が来る」とも話している。1980年代、大型コンピューター導入による情報時代が始まり建築家・ゼネコンはこぞってインテリジェントビルを設計・建設した。人間無視の情報機器優先のビルが出来上がり、「シックビル」騒動が発生した。科学技術の進歩が目覚ましい時代であるが、建築こそ、人間・心・コミュニティ・環境・景観・自然・歴史などの視点を持つべきである。

市民の日本古代史論では個人の思想信条・人生経験・生まれ育ち・人柄が強く影響する。考古学が何故文学部

に所属するか何時も疑問に思うが、最近は納得している。NHK大河ドラマ「麒麟がくる」が再開されたが、従来の明智光秀像とは異なった視点から語られ興味深い。

参考文献

高橋 修「義光流源氏の成立」(山梨県立博物館監修、西川広平編『甲斐源氏』戎光祥出版、2015)

中国陝西省のシーマオ遺跡の発掘

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

昔から中国のいわゆる「四千年の歴史」というが、黄河中流域の平野部「中原」が長く歴史の主舞台とされてきた。そこに、北方や西方から匈奴などの異民族が武力で侵入・攻撃してきて攻防を繰り返す、という展開になるのが普通なのだが、とんでもない方面で上古の大遺跡が発掘され、それが現在、調査進行中ということなのだそうである。

1

知人から連絡内容が標題のシーマオ(石峁) 遺跡についてのことであり、その主な内容は、中国の公式発表の引用などを踏まえた駒沢大学・角道亮介氏の論考「陝西省榆林市神木県石峁遺跡の発見と若干の問題」(『駒澤大学文学部研究紀要』74号所収、2016年3月)であり、ネット検索をかければ、当該論考や関係情報を見ることができるといったものであった。

これに対する私の当初の感触は、概ね次のようなものである。

角道氏の論考などでは、玉類が多く出る遺跡で知られていたが、1976年から遺跡の発掘が始まったとのことで、私は1976～78年に北京に勤務で居たが、その当時はなんの報道もなかったと記憶する。シーマオでは、ここ十年くらいのうちに全面的な発掘調査が随分進んで、遺跡事情が明らかになってきた。

当該遺跡の地、「陝西省榆林市神木県」はいまは「陝西省榆林市神木市」(市の下の県クラスの市という行政区画)になっており、神木市域の南側で黄河上流部支流の秃尾河北岸の高家堡鎮にその遺跡がある。陝西省の東北端部にあって、延安(毛沢東の大長征の最終地で、西安のほぼ北方の250キロほどの山間地)から東北へ約220キロ、内モンゴル自治区の都・フフホト市からは黄河を挟んで南西へ約270キロの地点に位置する。黄河上流の大湾曲部の南側の東部にあって、広い意味ではオルドス(鄂爾多斯) 地方のはずれになる(地図ご参照)。

オルドス高原は、いまは殆どが砂漠かゴビの模様だが、昔は大森林地帯であって、そこに殷族などを含めツングース族の先祖が住んでおり、森林に住む鳥類を主なトーテムにし、豊富な木材で鉄精錬をしていたといわれる。白川静氏の著『中国の神話』にも、その辺の事情が取り上げられる。そうしたことから、拙著古代氏族シリーズの『天皇氏族』では、同じ鳥トーテムをもつ天孫族の故地をオルドス地方に考えて、最後のほうに触れている。

シーマオ遺跡からは、遠隔地から運ばれたヒスイなど大量の玉類・石製品が石棺墓・甕棺墓から出土し、敵対勢力(異民族)で生け贄の若い女性の多量の頭蓋骨(80個という)が出たと報告される。この辺は、前者は高層階段状の石造構築物ともあいまって、わが国天孫族の石造・城壁の石刻関係技術や三種の神器に通じそうであり、多量の人的生け贄は殷の習俗・祭祀にも通じる。あるいは、後に黄河を下るなどで中原に入り、その後の東夷種族の活動や殷王朝につながるのかもしれない。

2

これだけの記事ではやや分かりにくい面もあるので、最近までの日・中両語での報道や論考・ネット記事の引用などを踏まえて、以下にもう少し紹介する。

まず、遺跡の名は「シーマオ遺跡」と呼び、漢字では「石峁」と書く。第二番目の漢字は、いまのMSのOSソフトでは文字化けしないと思われるが(古い一太郎やテキストファイルだと、この漢字の表記ができずにPC画面では消える場合がある)、山カンムリに、下のほうの部分は「卯」であり、中国語の発音が「マーオ(maoの第三声)」となる。この漢字をこれまで見たことがなかったので、諸橋の『大漢和』を見たら、「峁」は出ているが、「峁」の漢字は出ていない。ネット上では中国語のネットに意味がでているが、もちろんすべて漢字だけの説明である。愛知大学



編の『中日大辞典』にはネット記事の和訳とほとんど同義の説明がなされるが、それによると、「中国西北地区にある丸い頂で傾斜のある黄土丘陵をいう。多く地名用字」とある。

先に「高層階段状の石造構築物」と表現したが、これを「中国式ピラミッド」と表現するものもあり、内城の中央に位置する皇城台と呼ばれる台状遺構で、「大台基」とも表現される。その頂上部は、周りの敵などへの見張り台でもあり、また支配層の住居地にもなり、神殿や貯水槽・工房もあった模様である(皇城台は、国家文物局が発表した2019年の中国十大考古新発見の第三番にあげられる)。そうすると、「石峁」というのは、この構築物を指した地名なのかも知れない。中国の古代皇帝の墳墓には、中国式ピラミッド状のものがあつた、秦の始皇帝陵もそうした構造だとされる(私が1977年に訪れた時は丸い丘という感じだった)。

シーマオ遺跡はいわば城壁部分が先に知られ、近くに続く万里の長城の延長くらいに当初は思われた(漢代の長城は榆林市を通っていた事情がある)とのことだが、発掘が進むにつれて独立の大城郭が知られてきた。その城址面積が4.2平方キロ余とされる。当遺跡が内城・外城の二重の石積み城壁(古代を通じて中国の都市でよく用いられた初期の都市設計)を持つ大規模な拠点(内城域・外城域が各々約2平方キロ内外)であつて、新石器時代後期の拠点集落である山西省臨汾市の陶寺遺跡(帝堯の都かという。約2.7平方キロ)や浙江省太湖周辺の良渚遺跡(約3平方キロ超)とも比肩される大規模で、十キロ超もの長い城壁を持つ点に特徴があるが、同時に、その年代が夏王朝のものとする河南省洛陽市偃師市の二里头遺跡(仰韶の東方約百キロ)とどのように関わるのかも重要な問題だと角道氏は指摘する。

シーマオ遺跡とほぼ同時代の石造都市が、これまで70以上も発掘され、そのうち十もの都市は同じ禿尾河流域にあるといい、これら都市が連帯してシーマオ圏を形成した可能性もいわれるから、西安あたりまで伸びる黄河中流域の仰韶圏とは別個の政治体なのであろう。当該遺跡の炭素14等による年代測定法では、紀元前2300年頃～同1800年頃という数値が最近出て、殷(商)王朝や夏王朝よりも古いということとなり、それが、気候変動が主要因のようで、近くの森が消え砂漠が拡大して、これら遺跡群が放棄された。

夏王朝の存在については、二里头遺跡などの発掘が進んで、中国の学界では既に確認されたといわれるが、日本の学界ではまだ確証がないとして、夏王朝の存在を認めるのに慎重な姿勢がかなりある。漢字が出てくるのは殷王朝の後期くらいからだから、それより前は文字による史実の確認ができるはずがなく(「半坡陶符」などを漢字の起源とみる研究者もいるが)、遺跡などの物証で殷王朝より古い「王権的な存在」があつて、それが『史記』などに言う「夏王朝」と考えてとくに矛盾がなければ、それを認めてよいと思われる。

夏王朝より古い為政者としては、『史記』では「五帝」の神話しかなく、あるいは黄帝の崑崙城ではないかという可能性すら中国では言われる。これについては、「黄帝」が竜蛇信仰をもつ模様の夏王朝につながるとしたら、「シーマオ遺跡」のほうは、むしろツングース系の殷王朝などにつながる「白帝」たる少昊金天氏に関連して考えたいところもある(少昊金天氏が黄帝の子の玄囂に当たるという『史記』の系譜は違うと思われる)。ところが、少昊金天氏のときにはもう黄河下流部に出て来て、山東半島基部あたりを根拠とした国を建てた(都を山東省曲阜市あたりに置く)という伝承があつて、少昊は曆を作成し、官名を玄鳥氏・丹鳥氏・青鳥氏など鳥類の名で呼んだと伝える『春秋左氏伝』昭公十七年条)。

山東省あたりの新石器時代には、黄河中流域を圏域とする仰韶文化(河南省西北部の仰韶の地名に因るが、陝西省の西安郊外の半坡村遺跡遺も重要な拠点)とは異なる「大汶口文化圏」があつたとされる。これは、山東省泰安市(曲阜の東北約60キロ)の岱岳区の大汶口镇の遺跡に由来し、黄海沿岸・渤海南岸から魯西平原東部、淮河北岸の一带まで広がっていた。大汶口では、1960年代前半に発掘調査が開始され、早期・中期・後期と三つの時期(全体で紀元前4100年～同2600年頃という。飯島武次氏は前4300年～同2800年とみる)に分けられるが、仰韶文化とほぼ同時期かそれよりも古いと確認されたという。その遺跡からはヒスイ・トルコ石・象牙などの加工品や陶器が多く発見され、遠隔地との交易などで遺物はシーマオ遺跡と通じる。シーマオ遺跡が大汶口文化より古いものということであれば、人の流れは西域から黄河中下流域へと自然なのだが、上記の算出年代ではそれが逆でもあつて、この辺の事情が良く分からない。

ちなみに、中国での上古代年代確定の国家的事業「夏商周年代確定プロジェクト」は終わり、夏代はほぼ紀元前2070年に、商代はほぼ前1600年に始まり、殷周革命は前1046年とされたが、私には、それらが年代をまだ古く出し過ぎると思われ、飯島武次氏の『中国考古学のてびき』(2015年刊)でも、「黄河中流域における青銅器文化の開始(夏王朝ということか)は前1750年前後で、殷王朝の開始は前1500年頃と考えることができる」と記述する。今回のシーマオ遺跡の年代もまだ多少古すぎる感もあるが、それよりも大汶口文化などの年代も見直しの必要がないのだろうか。ともあれ、炭素14による年代測定法は、中国ではどこまで精度があがっているのかという疑問を感じないでもない。

3

シーマオ遺跡の考古調査では、一万点以上の各種器物の中には、三千箱以上ある陶片があり、骨針も多い。十

数片の焼かれたト骨も出た。象牙製品や重要な楽器「口琴」も発見された。この口琴は現在、漢民族を除く、遊牧民や狩猟民などの少数民族が多く使用するとされ、例えば、モンゴル族、チャン族(先祖が羌族)、オロチョン族、エヴェンキ族、満州族などや、雲南省の一部の少数民族の間で流行しているとのことである。海外のイヌイト、インディアン、北海道のアイヌ族などもこの楽器を得意とするとの説明もあって、この辺も昔の西戎(東夷)、北狄系の種族とかツングース系の種族がシーマオ遺跡の住民であったかとみるのが自然そうである(日本民族に近いかも知れないとか、戎狄文化に属するとの見方も中国などにある)。

シーマオ遺物のなかで、鬲や三足瓮などの土器は、北方近隣の朱開溝遺跡(内モンゴル自治区オルドス市ジュンガル旗)や上記山西省の陶寺文化との関連性が指摘されており、オルドス関連ともいえよう。これから、中国各地で更に発掘が進み、様々な新事実がわかってくるのだろうが、歴史というのは奥深いものだと感じる

ともあれ、「神話」ということで、様々な所伝を否定するのはおかしな姿勢だと思われる。中国社会科学院考古研究所の王巍所長は、「堯舜時代はもはや伝説ではなく、確実な史実によって証明された」と述べたという(SciencePortalChina)。本稿では、上古中国に関する最近の発掘状況の一端を概略ご紹介するにとどまるし、粗い表現もあるが、ご関心があれば、ネットでこれら上古遺跡関係の記事をご覧ください。

(2020年9月下旬に記)

コロナ災禍での大学教育・研究会開催と邪馬台国論争

関西大学大学院・本会特別顧問 森岡 秀人

2020年9月25日段階で感染者数約3000万人、死亡者数約94万人。Covid-19による犠牲者は、こうして一文を草している間も世界中で刻々と増え続けている。寄稿する9月30日には新型コロナウイルスの死者は100万人に達するだろう。この間、どの国の人も社会の激変と直面し、未来予測も容易にはできない渦中であって当惑した。WHOのパンデミック宣言から既に半年が瞬く間に経過しており、昨年より時間が経つのが早く感じられる。年間40億人が利用していた世界の航空機の実態を考えると、人の動きは完全に破綻した。長い人類史を扱う考古学関係者も物質資料から感染症の証左を適確に読み取り、医学に貢献し得る情報などを緻密な研究から導いたものはきわめて乏しく、普段の調査・研究において集団論や伝播論、クラスター論などと深く関わりつつも遭遇したこの社会には心底お手上げである。

普通に行ってきた大学の授業や考古学、古代史などの研究会も、三密回避、感染症対策という全く不慣れであった事態と遭遇し、方針転換や工夫、配慮がほぼ日常化しつつある昨今、社会と自分の行動を大きく見つめ直す時間が急増した。正直言って、昨今の今頃は何も知らぬ私がいて、平常時にはありがたいことが普通として見做され過ぎてきているので、人間というのは不可思議なものである。地球全体が細部を問わなければ、同じ方向を持つ、言わば連帯といったものが大枠として備えなければ、人類すべての危機が猛スピードで容赦なく襲い掛かってくる。こうした新型コロナウイルスの蔓延は、人間活動や資本主義経済の抜本的再考、行動変え、思考の転換を個人、集団の両面で確かに迫っている。国境なきグローバル経済や観光立国という言葉を書くことさえ行き詰った社会では空しさを誘う。博物館・美術館・資料館の特別展入場者の数を競い合い、手放しで多いことを誇らしげに言う時代が瞬く間に去っていった。中止や延期、入場制限が厳格に行われており、入れることの幸せを噛みしめている人も増えたに違いない。

関西大学大学院(博士前期・博士後期)・学部と甲南大学文学部歴史文化学科で考古学課目の非常勤講師として教壇に立ち、一年間前期・後期併せて6教科を教えていたが、4月からは完全にオンライン授業の要請があり、試行錯誤の上、Zoomを用いる考古学教育やビデオ撮影による黒板・白板授業、画像・動画の活用などを進めてきた。そして、乏しい知識と強くない機器利用であらゆる手段を試行しながらの努力だけはしてきたが、今現在受講生の顔はほぼ知らない状況で、成績なども苦慮に苦慮を重ね採点した。1日90分の講義を5回450分行い、同時配信にしたり、ユーザの要求に応じて時間自由で講義の配信が受けられるオンデマンド方式にしたりで、学生側にとって実際の満足感が得られるのは何かが掌握できぬまま、日時が経っていくのが大きな不安の種でもあった。誰もいない教室でたった一人喋り続けたこともあったが、無人＝反応0であるから、自分の授業を自身が後からノートを取りながら聞いて、速度や理解度、資料提示などを学生の立場で確認する時もままあった。こんな経験は全く初めてのことである。インターネットやデジタルがコロナ社会の苦境を支えていることを実感するが、こんな時、一人か二人学生が座っているだけでも、喋り方は全然違うだろうと受講生が教室に座っていた日常が羨ましく思えてきた。人がいないことは別の緊張感を伴うし、板書の漢字の誤りもいつも以上に要注意だ。「対面授業」という言い方はこれまで少なくとも私には定着しておらず、今までそれをしていたはずなのに、あらためてリアル、臨場感といったものを考えさせられる。すいすいとリモートへ轉換される方々、教員には驚かざるを得なかった。Zoomをうっかりマイクミュートで使い、話したことが2時間近くやり直しを迫られたこ

ともまもあり、その時は本当に空しく、悔しく、操作は失敗あるたびに覚えていった。もっと基礎から知りたいと教本を二、三冊買うことにもなった。

他方、研究会や学会も延期や休会、中止のものが多かったが、最近ではリモートでの実施が急増していった。この潮流が人・物の移動制限下、定着する気配である。講演会・シンポジウム・講座なども遠隔のものが少しずつ増えてきた。コロナ災禍も長丁場が予測され、人の話を聞くことがやはり面白い、分かりやすいということであろうか。関係書・研究書を精読する機会も多くなったと思われるが、人と人との触れ合いは動画や音声だけでも欲せられるようになってきたのは事実である。芸術・文化・歴史もスポーツと並んで心身の活動としては、塩分や糖分の自然体での欲求と一緒に、自ずと人間に希求されるものと言ってよい。学究的精神の起動など、平たくは「心のビタミン」と呼んでもよいだろう。

現在、オンライン研究会、学会などに一度でも出席しているのは、日本文化財科学会・関西縄文研究会・近江貝塚研究会・兵庫考古学談話会・京都弥生談話会・城郭談話会・考古学研究会全国委員会・古代文化編集委員会……であり、過日行った私を代表者とする科研基盤研究B「弥生時代高地性集落の列島の再検証」(申請研究機関〔公財〕古代学協会)の研究・検討会では、ウェイブ会議システムZoomで遠隔の研究者を結び付け、対面の研究者とも融合するハイブリッドスタイルなるものも導入して、かなり臨場感あるものとなった。東は北陸北部から北九州までの大学・自治体の研究者たちが一堂に会した形で、一種異様な雰囲気であるが、質疑や議論も進み、自己紹介なども大変和やかな印象を持った。遠隔地の人が傍に座っている人よりも甲高い声なので、まるでここに飛んでやって来たような錯覚を覚える。これはひとえにサブを果たしてくれる天理大学の桑原久男教授の気転の良さで、音響性能の良いスピーカーなどそのための機器類を揃えられた事務局麻森敦子さんの素早さが実現へと導いた。出席者がいつもより倍増した感じだった。

授業や研究会などでパソコン上のフラットな画面もなかなかよい。その配置などを細かく気にする人もいるようだが、緊張感自体はほとんどなくなるので、若い学生も発言がしやすい。持論や研究姿勢などを一生懸命喋り続ける学生を正面から見て大変頼もしさも感じた。後ろ姿、背中を見るのではなく、顔を見るばかりという変革、無論進行の上では多人数だとビデオオフにすることも多くなった。というか、そんな点は自由であり、研究会などでは最後まで名前と顔が知らないままに終わることも普通である。質疑応答、意見を言う敷居は高くなった人と俄然低くなった人がいるようである。ウィズコロナ社会では方法的定番として確実に定着するものと思われる。仕事・生活の変化は著しいが、学問の世界も大きく変わっていく気配がある。リモートでは地方からの参加者が増加し、学知の都市部集中は避けられる。通常では開催場所が東京、大阪や奈良、京都、福岡、岡山、名古屋などに固定化されていた研究会にも北海道や沖縄からのZoom出席者が皆歓迎の中、登場される。それぞれコロナ感染の原因者や罹患者にならず、交通費・参加費・懇親会費などが基本残ることになる。遠方者の宿泊費もかからない。それぞれ小市民であり、みんな助かる反面、一方で施設・運輸・飲食業の関係者は一人一人が少額であっても、この世界からも社会に大きな痛手を作っていると真剣に考え込むことにもなる。連関的に芋ずる式に考えると、複雑な心境だ。本来、自然の中でオンラインとオフラインが自在に往復するありようがあったのかもしれないが、今は一人の行動変革が連鎖して、他の業種や分野に負の影響も与える。そう言えば、創設70年以上の歴史を誇り、森浩一代表以来、櫃本誠一、菅谷文則、寺沢薫と続く代表者を立ててきた古代学研究会は、現在私が会の代表を務めており、3月以来例会活動を延期させてきたが、9月第3土曜日からは対面での実施となった。司会者からは、「半年間、余分にご準備ができて、レベルアップしたでしょうね。」の挨拶が飛び出すと、みんなが苦笑した。感染者の少ない奈良県や和歌山県の研究発表者が感染者の多い大阪府の会場に来られ、古墳時代後期の大型横穴式石室の問題を比較検討する例会ミニシンポを開催した。会場は36人最大の厳格な制限下、ぎりぎりの数で受付を終了し、ほっと胸を撫でおろした次第である。久しぶりの対面研究会であり、懇親会は自粛したものの、参加者には笑顔と親しみ深さを垣間見ることができた。

巷では、オンライン飲み会アプリを使った同窓会もあるらしい。結婚式やお葬式も残念ながらご本人には会えない、最後の別れが言えない状況になってきた。だが敢えて対面の結婚式を敢行した教え子もいる。勇断がいる実行派の二人を大勢が祝福した。いろいろと記してきたが、画面のフリーズは研究会討議の本当に重要な指摘、発言の時にままあって、半ば滑稽な雰囲気にもなる。アクシデントの後、議論が浮遊し、途絶えてしまうことも多い。インターネットによるリモートワークは一挙に拡大し、こうした技術の歩みを顧みれば、今から半世紀も昔に戻ると誰もががしない、できないであり、コロナ災禍が50年前に襲ってきたなら、狭い考古学の世界、範疇に照らしてでも右往左往全く異なった社会対応となったことだろう。現今の推移を俯瞰すれば、多い雑務や接客が減り、時間を生み出した人、商売あがったりで深刻な経営と貧困に苛まれる人、千差万別の世の中が現在進行中である。これが普通の世の中に戻ってくる日を迎えると、そこに出向くのが億劫になる人も当然出てこよう。また、動くこと、移動することがどんなに大切な行動だったかも同時に判明することだろう。化粧品が売れ残

り、病院通いをやめた分、市販薬の需要が急増する。感染リスクを怖れて病院に行かない人が増えたから、健康も自家供給的に守るといふことなのだろうか。強圧的なデジタル社会の到来が急ぎ足で席卷し、都心から郊外移動を余儀なくされ、コンパクトで淡白な自然と歩む生活志向に傾いたという話もよく聞く。新型コロナウイルスは、確かに人間や自然を収奪の主対象とした資本主義社会下の人間活動の流れの本質を破壊し始めているように見え、不気味でさえあり、不透明感に覆われる毎日が過ぎていく。

紙数も尽きてきたが、颯爽と登場してきた邪馬台国論争と関わる本が出版された。畏友関川尚功が書いた『考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国』（梓書院、2020年9月20日刊、本体1800円＋税）である。雑誌『古代文化』誌上に新刊紹介する予定なので、深く内容には立ち入らないが、表紙のタイトルを見て勘違いしやすい人は多いと思われる。彼は邪馬台国大和説、畿内説論者ではない。考古学の立場から熟考して邪馬台国大和説や畿内説が成り立ち難いことを平易な口調で述べている。邪馬台国論争好きな一般市民や高校生・中学生は一日で読破してしまうだろう。小見出しも多く、文体も主張がはっきりし、文字列の行間も十分あり、「関川考古学」の学問的姿勢が全体を貫いている書だ。

彼の話言葉を知っている方は、50年間ブレや揺らぎのない纏向遺跡論、箸墓古墳論、古墳出現年代論、大和考古学像・奈良県遺跡像が短時間で理解できるであろう。思考の行き先は、「考古学が示す邪馬台国大和説の不成立」に帰着する。そこへの導きを大和の遺跡、古墳を掘って来た現場主義の物の見方で書き進めている。私はあらためて関川尚功の歴史としての論理を確認することができた。1971年、関西大学文学部二回生にして纏向遺跡の発掘調査に従事し、石野博信調査主任を日常的に支え、千単位の古式土師器の土器実測図の原図を描き、初めての二分の一縮図レイアウト一括トレースに挑んでいた頃、しばしば尼崎の塚口の一間の下宿に転がり込んだものである。20歳で庄内式土器の近畿圏分布地をすべて掌握し、編年細分してゼミ発表する姿の同期生関川には不思議に憧憬の念も抱いた。この本の論旨は今読み返しても古びていない。ずっと一貫した五感の強みに根差したものである。彼の下宿生活には無駄を削ぎ落とし、質素で「信州の熊」の仇名の通り、ノッソノッソとした勉強ぶり、仕事ぶりであった。本棚の端に『暮しの手帖』が何冊も並んでいた。当時隔月刊の生活総合雑誌であり、貧乏な下宿生の知恵袋を見たような気がした。共通しての二人の合言葉は、「確かな観察」である。佐原真が常々私たちに投げかけていた姿勢であり、毎日唱えていた。しかし、考古学上では二人の間で大きな考え、解釈や方法論の違いが判然と認められる。暦年代論はその典型だ。庄内式土器の出現年代一つとっても、120年程の格差が横たわっている。世間でも知っている人は多い。その詳細は、吉川弘文館が刊行を続けている歴史文化ライブラリー『箸墓前夜 古墳出現への長くて短い道程』で明らかにしたく思っている。

今夏の厳しい暑さはほぼ和らぎ、一雨降るたびに秋が深まってくる。届かぬ高さの高層雲には巻雲(絹雲)がはっきり窺え、天高き秋雲の様相を呈している。本という重量荷物運搬で突然襲われた初めての激痛、腰部脊椎管狭窄症というのもウロウロと動くなという天からの思し召しかもしれないと思う昨今である。だが完治させるには、現場を歩き見るしかないだろう。(2020年9月30日 稿)

『朝日新聞』の記事は、客観的根拠にもとづいているのか

安本 美典

今年(2020年)の6月6日に、奥野正男氏がなくなられた。享年88歳。

奥野正男氏は、邪馬台国九州説の雄で、宮崎公立大学の教授などをされ、また、『神々の汚れた手』(梓書院刊)で、毎日出版文化賞を受賞されるなどされた。

私もいろいろと、大変お世話になった。

つつしんで、哀悼の意を表し、ここにご冥福をお祈りする。……黙禱。

奥野正男氏についての、追悼の記事が、『朝日新聞』の7月18日の夕刊にのっている。そのことは、大変結構なことなのであるが、その中に、次のような一文がある。

「近年は畿内説に押され、少々劣勢気味の九州説。その立役者の鬼籍入りは、論争華やかになりし時代の終焉しゅうえんのように思える。」

「この記事について、先生は、どう思われますか。」というような質問が、カルチャーセンターなどの講演会であったので、ここに、私の感想を記すことにする。

まず、次のような事実がある。

今年になってから、奈良県を中心とする近畿で、長年考古学研究にたずさわって来た方々により、邪馬台国は九州にあったとする見解の本が、あい次いで刊行されている。

今年の2月に、奈良県立橿原考古学研究所の企画学芸部長の板靖ばんやすし氏著の『ヤマト王権の古代学』(新泉社刊)



が、刊行されている。

板靖氏は、述べる。

「私は、……邪馬台国北部九州説にたつ。」

「弥生時代中期から後期の近畿地方においては、中国との直接交渉を示す資料はほとんど知られていない。」
「邪馬台国の時代、すなわち庄内式期においても、魏と交渉し、西日本一帯に影響をおよぼしたような存在が、奈良盆地にはみあたらない。邪馬台国の所在地の第一候補とされる纏向遺跡の庄内式期の遺跡の規模は貧弱であり、魏との交渉にかかわる遺物がない。」

また、今年の9月には関川尚功氏の、『考古学から見た邪馬台国大和説—畿内ではありえない邪馬台国』（梓書院刊）が刊行されている。

関川尚功氏も、板靖氏と同じく奈良県立橿原考古学研究所の所員であり、纏向遺跡についての大部の報告書『纏向』（橿原考古学研究所編）をまとめられた方である。今年刊行された本の中で、関川尚功氏は述べる。

「弥生墳墓による大和と北九州・西日本地域との比較をみると、その差は歴然としていることが分かる。」

「3世紀頃の奈良盆地において、北部九州の諸国を統属し、魏王朝と頻繁な交流を行ったという邪馬台国の存在を想定することはできない。大和地域の遺跡や墳墓、そして各種の遺物にみる考古学的事実の示すところは、明確に邪馬台国の大和における存在を否定している、と言わざるを得ないのである。」

板靖氏も、関川尚功氏も、かなりくわしくその見解の根拠を述べておられる。

私も、次のような事実などを述べたことがある。

『魏志倭人伝』は、倭人は、「鉄の鍬^{やじり}」を用いる、と記している。弥生時代において、鉄の鍬は、福岡県からは、奈良県のおよそ100倍出土している(398個対4個)。

あらかじめ一定の意見をもってると、当然見えるべきものが見えず、見えないものが見えることがある。自説にとって不都合な事実を見落としやすい。不都合な本は、読まない傾向が生ずる。

個々の研究者のばあいは、それでもよい。不当な見解は、議論の過程で、淘汰されて行くからである。しかし、新聞社のばあいも、そうであってよいのか。

第1に、九州説が、「劣勢気味」であるとすれば、板靖氏や関川尚功氏のような専門家が根拠をくわしく示している説が、なぜ「劣勢気味」になるのか、それ自体が、大問題であろう。

第2に、さきの朝日新聞の記事の中の「劣勢気味」という判断自体が、客観的根拠をもっているのか、という問題がある。

たんに、近畿説の人からみれば、近畿説が優勢に見え、九州説の人からみれば、九州説が優勢にみえるというていどのことではないのか。要するに、記者の方の主観的判断、希望的観測ではないのか。

第3に、そもそも、問題自体が優勢か劣勢かで判断すべき問題なのか。

学問とか、科学というものは、「確実な根拠が提出されているか」「きちんとした証明が行なわれているか」を第1に考えるべきものである。

科学や考古学の歴史において、たった1人のガリレイ、たった1人の竹岡俊樹氏(旧石器捏造事件の告発者)が正しく、圧倒的優勢者たちが誤っていたというような事実があることを忘れてはならない。

優勢か劣勢かなどを考えるのは政治家などのすることである。

優勢をとることをめざすと、「証明よりも、宣伝を優先する」ということになりかねない。大本営発表主義的な誤りを、おかしやすくなる。

第4に、次のような問題がある。

新聞社の方は、しばしば、「言論の自由」ということを強く主張される。しかし、新聞社の方にくらべると、ふつうの人は、「言論の自由」が、圧倒的に与えられていない。何十万分の1、あるいは、何百万分の1である。そのことは、『朝日新聞』の発行部数と、この『邪馬台国新聞』の発行部数をくらべるとおわかりであろう。

さきの、朝日新聞の記事には、十分な客観的根拠が示されていない。そして、大本営発表のような同調圧力のおおいを、すこし感じる。

ある特定の研究者の訃報の記事に、その研究者の生前の業績を否定しかねないような、記者の個人的な見解、判断、見方によっては、思いこみと見えるものを、大新聞という公器をかりて発表するというのは、どんなものであろう。

個人的な見解の発表であれば、新聞以外の公平に討論が行える場で発表してほしい。



関川尚功氏「邪馬台国から見た大和説」

卑弥呼 = 天照大神とその後継者 = 饒速日命(物部氏の祖)

飯田 眞理

一、卑弥呼 = 天照大神説について

近年この説を唱える文献学者はほとんど存在しない。在野の研究者にはこの説の方々が多く存在するのである。筆者もこの説の真実性は90%以上と考える。実は戦前から戦後にかけて多くの古代史家がこの説を唱えていたのである。『研究史・邪馬台国の東遷』安本美典著(昭和56年)より抜粋して紹介する。

①白鳥庫吉 『倭王卑弥呼考』 明治43年

(卑弥呼に関する記事と記紀の天照大神を比較して) その状態の酷似すること、何人も之を否認する能わざるべし……)

②和辻哲郎 『日本古代文化』初版 大正9年

記紀の伝説は完全に魏人の記述と一致する

③栗山周一・邪馬台国東遷説の先駆者 昭和8年

女王卑弥呼は、天照大神神話を生んだ根拠をなすものであることは、大体想像がつくのである。……卑弥呼の血族または関係の氏族が、大和地方に移り、九州の倭国の名をそのまま称して『大和』といったと解すべきである。

④林屋友次郎 駒沢大学教授 昭和21年

(公然とそれを口にしてはいなかったにせよ) 卑弥呼を天照大神と考えていた人が少なくなかった。しかし、……このことに気付いていた人たちも、それを黙認せざるをえなかったのである。

⑤飯島忠夫 学習院大学教授 昭和22年

天照大神の時代は、卑弥呼の時代にあたる。筑紫の邪馬台は、すなわち高天原である。ヤマトという国名は、……九州の邪馬台の名をうつして、……大和の全地域につけられ、日本全土の名となったといえることができる。

⑥市村其三郎 東洋大学教授 昭和27年

日本書紀の編者は、卑弥呼を神功皇后とし、内藤湖南氏は倭姫の命とし、笠井新也氏は倭迹迹日百襲姫の命とし、女王としてのヒミコを格下げしたものといってよい。……ヒルメノミコト女王(天照大神)とは……それはまぎれもなくヒミコ女王のことでなければならぬでしょう。

⑦和田清 東大教授 東洋史学者 昭和31年

畿内には、あとにつけた大和国を除いて、ヤマトという固有の地名はない。邪馬台の勢力をつがなければ、ヤマトを名乗るはずがない。卑弥呼のことも、天照大神の伝説ぐらいになってしまったと考えても、よくはないでしょうか。

⑧佐藤春夫『現代人の日本史』 昭和32年

私は、卑弥呼については……神功皇后よりは、むしろ、神話に荘厳されるまえの、すなわち、素顔の天照大御神の面影を見出すような気がした。

⑨徳満小岱(こぬた) 九州古代史家 昭和40年

神話の中の天照大神こそ、卑弥呼女王の反映であり、高天原の原物語は、邪馬台国時代の伝承に外ならないであろう。……三種の神器は、北九州の弥生文化の特徴である鏡・玉・剣の三種に外ならぬ。高天原の原神話の中心舞台が九州にあるのは、邪馬台国が九州にあったからである。

⑩藤井英男 民俗学者 昭和42年

実在の女王ヒミコを天照大神に想定しようとする者が一人もいないのを不思議に思うのである。むしろ皆わかっているけれど、わざと避けようとしているのではあるまいか。

★以上のように「卑弥呼 = 天照大神」説は、誰しもが考えつく極めて合理的な説なのである。次に卑弥呼の後継者 = 饒速日命について述べる。

二、饒速日命は天照大神の孫(詳細には『季刊邪馬台国131号』)

①日本書紀における饒速日

日本書紀での饒速日命の初出は、彦火火出見(神武天皇)が東征する際の記述である。「塩土の翁に聞くと、『天の磐船に乗って、飛び降りた者がある。』と、……その飛び降りてきた者は饒速日というものである……」そして、饒速日は神武に帰順する。饒速日命を物部氏の祖と記す。

②ところが、平安時代に編纂されたとされる『先代旧事本紀』に次の記載がある。

「(天照大神の)太子・正哉吾勝勝速日天押穗耳尊は、高皇産靈尊の娘の万幡豊秋津師姫命を妃として、二柱の男児をお生みになった。兄は、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊。弟は、天饒石国饒石天津彦彦火瓊々杵尊。」つまり、饒速日は天照大神の孫で皇孫の瓊々杵(ニニギ)の兄ということである。ところが、ほとんどの古代史家は、「饒速日」と「天火明」とは別神で旧事紀編纂者が両神を合体させたものとする。しかし、これは誤りである。というのは、記紀では、瓊々杵の父は「正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊」と記されている。「勝速日＝忍穗耳」であり、「天津彦彦＝瓊々杵」である。「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」が二つの名を合わせたものではないことは明らかである。

③ところで、記紀において天火明は尾張氏の祖であると記す。一方、先代旧事本紀では、饒速日の高天原時代の子である天香語山命が尾張氏の祖であると記す。また、宮津市・籠神社の国宝『勘注系図』において、天香語山命は天火明の子であると記す。これらからも三段論法により「天火明＝饒速日」であることになる。

ところで日本書紀の本文では、天火明は瓊々杵の子でいわゆる海幸彦山幸彦の兄になっている。しかし、古事記や日本書紀・第六書と第八書では、天火明は天押穗耳尊の子と記されていて、先代旧事本紀と一致する。つまり、「天火明＝饒速日」は天忍穗耳尊の子で天照大神の孫(後継者)であることが真実であると考えられる。

④物部氏は天神氏族でありながら、大伴氏などと異なり、神代における遠祖の名が記紀に記載されていない不可解さがある。「饒速日＝天火明」で天照大神の孫であることによって、その不可解さが解消される。記紀において、「天火明」と「饒速日」を別神のように記したのは、おそらく、物部氏の祖先が天皇家の祖先より上位であることを隠さなければならなかったのあろう。

三、ヤマトは饒速日命が故郷の邪馬台国の名を移したもの

『日本書紀・神武紀』の最後の記述は極めて重要である。「饒速日命は天の磐船に乗って大空を飛び廻り、この国を見てお降りになったので名づけて『空見つヤマトの国』という。」高天原から天降った饒速日が奈良盆地をヤマトと名づけたということである。このことは『先代旧事本紀』にも記されており、おそらく日本書紀編纂者が物部氏の「家伝」を引用したのであろう。その「家伝」は、物部連麻呂などから提供されたと推測する。この「空見つヤマトの国」は万葉集や続日本紀に多く記載されていて、当時の常識であった。筆者は、この『空見つヤマトの国』について次のように考える。卑弥呼＝天照大神の孫(後継者)である饒速日が、「故郷の邪馬台国(ヤマト国)の名を移して奈良盆地をヤマトと名づけた」ということである。

【終わりに】今や「卑弥呼＝天照大神」・「天火明＝饒速日」・「饒速日がヤマトと名付けた」などについて語る「学者」はほとんど存在しない。大王(天皇)の起源についてもタブーになっているようである。邪馬台国畿内大和説などを含むヤマト中心史観には、何かの力がはたらいているのではないかと思わずにはいられない。

「水行陸行帯方郡起点説(仮)」は成立するのか？

伊藤 雅文

魏志倭人伝の行程記事(図表1)の読み方は、古来連続で読まれていたところに戦後、榎一雄氏の放射説が登場しました。そして、近年よく語られるようになったのが、「水行陸行帯方郡起点説(仮称)」です。邪馬台国への行程(水行十日陸行一月)の起点を帯方郡だとする説です。

結論から言いますと、「水行陸行帯方郡起点説(仮)」はかなり恣意的な読み方だと思います。

そもそも、邪馬台国への行程記述の頭に、「自郡至女王国万二千里」の「自郡(帯方郡より)」のような語句がないのにその起点が帯方郡だというのなら、伊都国、奴国、不彌国への行程記述の起点も帯方郡でなければなりません。しかし、帯方郡の近くに伊都国や奴国があることは考えられません。

その批判をいったん留保して作成した行程イメージが図表2です。

このように帯方郡を起点とすると、邪馬台国の位置が非常に漠然としたものになります。帯方郡から南へ水行10日、陸行1月でたどり着ける場所はあまりにも範囲が広すぎます。魏志倭人伝の原史料となったのは郡使の復命報告書だと考えられています。彼らには倭の地に関する詳細な調査が命じられていたはずですが、こんな具体性がなく、再現性のない報告は許されるはずがありません。

さらに、この説では投馬国の扱いが説明できません。邪馬台国へのルートとは別ルートで、なおかつ邪馬台国との相対的な位置関係や、その存在の重

倭都至後輸船是亦自倭國向南東到其北岸邪馬台國七千里
倭國向東至南には船津に於て水行し、船西を南へ向いて東へ
行ていく。その途中に倭國の北岸である邪馬台國に到着する。
始地 一海千里至伊都國
初め水行十日、船西を南東と別國に至る。
又南行一海千里名曰海船至一大國
本國内、船西を南東と別國に至る。その途中に倭國の北岸
に到る。一海千里至邪馬台國
本國内、船西を南東と別國に至る。
東南行五百里到伊都國
東南行五百里陸行一月、東土に邪馬台國に到る。
東南至奴國百里
東南行一千里至奴國に到る。
東行至不彌國百里
東行一千里至不彌國に到る。
南行陸行一月、東土に邪馬台國に到る。
南行陸行一月、東土に邪馬台國に到る。
南行陸行一月、東土に邪馬台國に到る。
其南行百餘里
その(邪馬台國)の南行百餘里有る。
自郡至女王國二千里
倭國の北岸に、一海千里の倭國に到る。

図表 1

要性も記されない投馬国に言及する蓋然性はまったく見いだせないのです。

百歩ゆずって、「南至邪馬台国」の「南」は前国からの方向であり、「水行十日陸行一月」は帯方郡からの日数であると好意的に解釈すると、行程イメージは図表3のようになります。

一見、これなら整合性がとれているようにみえます。

しかし、これだと不彌国から投馬国、投馬国から邪馬台国への距離を記さない不自然な記述になってしまいます。その間の距離が100里と1000里では所在地が大きく異なります。これでは邪馬台国までの行程を報告したことにはなりません。

さらに好意的に、不彌国の南に投馬国が、その南に邪馬台国が隣接していたと考えても、投馬国の記事が「水行陸行帯方郡起点説(仮)」の成立をはばみまず。

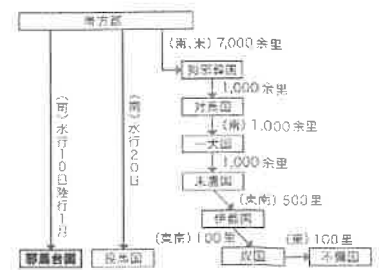
行程上、明らかに末盧国から不彌国までは陸行しているのに、投馬国への行程には陸行がないのです。明らかな矛盾です。また、邪馬台国までの行程の途中にある投馬国への行程(水行20日)が、邪馬台国までの行程(水行10日陸行1月)より長いと推定できるのも、説の破綻を物語っています。

倭人伝は、『三国志』魏書の最後の最後に、遠く離れた辺境の地にいる倭人について書かれた一節です。そんな箇所に陳寿が「ではここでクイズです。答えは何でしょう」というような謎かけをすることは思われません。ここは、誰もが一読で理解できるように、「連続説」(他の説がなければこのような説の名も不要ですが)で記されているのだと思います。

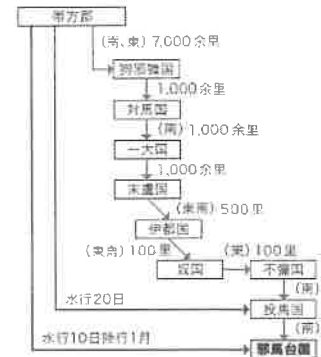
★★★YouTube配信スタート!

古代史新説チャンネル『邪馬台国と日本書紀の界限』を開設しました。

ぜひ、チャンネル登録のうえ、ご視聴ください。



図表 2



図表 3

『全ての旅程は帯方郡起点の放射説』 - 魏志倭人伝の旅程はみなし日里換算 -

井上 悦文

一 はじめに

魏志倭人伝には、帯方郡から不彌国の里程記事、投馬国への日程記事、邪馬台国への日程記事が連続で記され、また、魏志倭人伝の本文は漢字棒書きで記されています。よって、魏志倭人伝の旅程について、「順次式(順次説)」の解釈がさも一般論や通説であるかの如く理解され、それを正論や真実と思い込んできました。しかし一般論や通説が必ずしも正論や真実とは限らず、むしろ、まさかと思えることこそが正論や真実のこともあります。

耶馬臺国の比定地論には諸説あります。しかし陳寿の耶馬臺国は魏志倭人伝を正確に解釈した場所になければなりません。

近畿説の根拠は、旅程を順次説で計算し、不彌国以降の南を東の誤りとします。ところが陳寿は、帯方郡から耶馬臺国の里程を一万二千里と明記し、また、帯方郡から不彌国の間の旅程には、各国間の里程とともに対海国と一大国の「方」を記して、不彌国到達の使節がすでに一万一千四百里を経過していることを暗示しています。帯方郡から不彌国の一万一千四百里は帯方郡から邪馬台国までの全旅程一万二千里の九五%であることから、耶馬臺国は不彌国から六百里(五%)の場所にあり、畿内ではあり得ないことが明らかです。

二 『魏略』や『魏志』をもとに撰述

魏志倭人伝は魏略や魏志をもとに撰述されました。三国志は中国二十八正史の一つなので、成立当時から正史であったと思いがちです。しかし事実は違い、むしろ成立直後は重んじられず、陳寿没後に、陳寿の生家に出かけて陳寿の著書のすべてを筆写取得せよとの皇帝の詔が出され、そこで筆写取得されたものが皇帝の手元に備えられました。

三 帯方郡から邪馬台国の全里程

帯方郡～耶馬臺国は、魏志倭人伝・魏略・魏志は、ともに萬二千餘里です。

四 帯方郡から不彌国の里程

(1) 帯方郡～狗邪韓国は、魏志倭人伝・魏志・魏略は、ともに七千餘里です。

- (2) 狗邪韓国～対馬国は、魏志倭人伝・魏志・魏略は、ともに千餘里です。
- (3) 対馬国～一支国は、魏志倭人伝には千餘里、魏志には一千里です。
- (4) 一支国～末盧国は、魏志倭人伝・魏志・魏略は、ともに千餘里です。
- (5) 末盧国～伊都国は、魏志倭人伝・魏志・魏略は、ともに五百里です。
- (6) 伊都国～奴国は、魏志倭人伝・魏志・梁書は、ともに百里です。
- (7) 奴国～不彌国は、魏志倭人伝・魏志・梁書は、ともに百里です。

五 不彌國からの残里数は六百里

魏志倭人伝と魏略、魏志、梁書ともに各三要素(出発地・距離・到着地)が同一なので、これらは陳寿の創作でなく、当時の中国の共通認識です。

帯方郡から不彌国の水行・渡海・陸行の合計は一〇七〇〇里であることから、全里程の一二〇〇〇里から一〇七〇〇里を差し引いた一三〇〇里が不彌国以降の残里数とみるのが一般的です。しかし狗邪韓国～末盧国間の各千餘里は渡海距離でしかなく、帯方郡から不彌国の真の里程距離を求めるには、対馬国の方約四百餘里と一支国の方約三百里を加算する必要があり、合計一一四〇〇里です。

よって、一二〇〇〇里から一一四〇〇里を差し引けば、残里数は六百里なので、つまり不彌国到着時点で全里程一二〇〇〇里の九五%にあたる一一四〇〇里をすでに経過し、残里数は五%の六〇〇里です。

六 里数は日里換算

耶馬臺国の比定地は大方の最大関心事です。しかし一里の解釈には長里・短里を含めて諸説あり、また、里が固定値とも限りません。

隋書には夷人不知里數但計以日とあり、倭人は里数の実測ができず日数を以て換算したとあり、大唐六典にも一日当たりの里数換算があることから、実測可能は実測値を記すが、実測不可の場合は日里換算を行う、つまり魏志倭人伝の里数は固定値でなく日里換算と思われれます。

狗邪韓国～末盧国の三つの渡海は各千餘里ですが、実測や地図では全く異なります。よって千餘里で同一なのは、実測が同一でなく要する時間が同一、つまり、日出から日没までの一日の航海距離＝千餘里と換算の意です。

よって帯方郡～狗邪韓国は七日の航海で、狗邪韓国～対馬国、対馬国～一支国、一支国～末盧国は各一日の航海です。よって、帯方郡から末盧国の間は合計十日の航海です。

七 投馬国と邪馬台国への旅程

- (1) 投馬国への日程は、魏志倭人伝・魏志・梁書ともに水行二十日です。
- (2) 耶馬臺国への日程は、魏志倭人伝・魏志・梁書ともに水行十日陸行一月です。

八 「里程」と「日程」は別次元の旅程

帯方郡から邪馬台国の旅程を順次式で解釈すれば、残里数六〇〇里を水行二十日と水行十日陸行一月の合計六〇日の旅程とみなすこととなります。六〇〇里は萬二千餘里の五%つまり二〇分の一なので、全旅程は残里数の二〇倍です。ならば順次式のみなし全旅程は、六〇日×二〇倍＝一二〇〇日、つまり三年三ヶ月以上のありえない旅程です。よって順次式解釈は、あり得ない旅程解釈です。

九 各旅程は帯方郡起点の放射説

魏志倭人伝の投馬国への旅程は、魏志には又南水行二十日至、梁書には又南水行二十日とあり、また、邪馬台国への旅程は、魏志には又南水行十日陸行一月、梁書には又南水行十日陸行一月日とあり、ともに、冒頭部分に「又」の一字があります。この「又」の一字の存在が、前旅程は又の前で完結していること、当該旅程は又から始まること、又の字は出発点の従帯方郡を暗示していることが明らかです。

よって、魏志倭人伝の帯方郡から不彌国への里程と投馬国への日程と耶馬臺国への日程は、順次式での解釈は誤りで、それぞれの旅程が帯方郡起点の放射式であることが明らかです。

女王国と男王国を見つけました !!

神尾 忠和

はじめに 中国語と韓国語が融和した漢文、日本語と韓国語が融和した漢文で、韓国語の音訓を借りて表現した漢文を筆者は融和文字と呼んでいます。邪馬臺国も狗奴国も解読できました。ただし、日韓・韓日辞典が必要

です。

女王国は八女市祈禱院字白石です

女王国は邪馬壹国と表現してある。邪の発音は中国語で「ジャ、シャ、ヤ」であり、韓国語で「サ」です。壹は中国語で「イチ、イツ、イン」と発音し、韓国語では「イル、ハッ、ハン」です。

邪馬壹国を中国語で発音すると、シャマイチ国です。シャマ(syama)は音韻の変化でシャーマン(syaman)となり、シャーマン1番・シャーマンキングというのが邪馬壹国の意味であることが分かるのです。

邪馬壹国を韓国語で発音するとサマハン国です。韓国語での邪馬(sama)はツングース・マンシュー語で「祈禱師」のことを「サマ(sama)」と発音するので、これを語源として邪馬と表現しているのです。ハンは「一番、始、頭、長、王」という意味があるので、邪馬壹国(サマハン国)とは「シャーマン王国。祈禱師王国。」と言っていることが分かります。

邪馬壹国は中国語で「ヤメイン国」と発音できる。『魏志』倭人伝の本文中に「其の餘の旁国」とあり、その中に「邪馬国」があり、この国名の意味は「祈禱師国」である。その祈禱師が卑弥呼であり、卑弥呼はこの邪馬国の「女王」なのです。倭国三十五ヶ国ものの王から共立されて「連合国」の王となった卑弥呼は、自分の邪馬国の建物を連合国の朝廷としても使い、国名を邪馬(sama・祈禱師)壹(han・王)国と称したのです。それは、馬韓国が五十余の部族国家だったのを、伯濟国が取りまとめて連合国の百濟国に発展させたのと同様です。

邪馬は中国語で「ヤメ」と発音し、壹は中国語で「イン」と発音する。「ヤメ」は福岡県に八女という市があり、八女市祈禱院字白石の地名がある。八女は「邪馬・sama・祈禱師」の音訓であり、院は中国語で「壹」の発音で意味は「一番・王」であるから、まさに八女(邪馬)市祈禱(邪馬)院(壹・王)が邪馬壹国の住所なのです。字白石の白は百と同音であるから、白石は百個の墓石のことです。卑弥呼が死んだときに「殉葬する者、奴婢百余人」とあるので、ここに塚があるのです。

男王国は菊池川流域の玉名市です

八女市の南に狗奴国がある。馬韓には狗盧国があり、弁韓には狗邪国がある。これは吏読文字であるのでどちらも「カラ国」と発音する。「カラ」とは「大沼」という意味です。各集落の役場は、川から堤を築き、小川として水を引き、大沼を作り、その付近に集落の役場を作った。その集落とその役場の名前を「カラ」と称したのです。この「カラ」を吏読文字で加羅・駕洛・加耶・狗邪などと表現してあるのです。

カラの「カ」の語源は、大檀君王儉が三神・五帝を定めた際に五大臣として「トッカ・ケガ・ソガ・マルカ・シンカ」を組織し、戦いの時には元帥となり、平時には国務大臣となる役職者である。後に「カ」は「王」の意味となった。『三国史記』に「王逢県一云皆伯」とある。皆伯は「カマ」と発音し、「カ」は「王や貴族」を称する名詞で、「マ」は「逢う。順序のはじめ。はたがしら」の意味です。

カラの「ラ」の語源は、渡し場を「ララ」といったもので、のちに「ナラ」とも言い「ナ」だけ「ラ」だけでもその意となったのです。韓国の古地名の末尾に「那・羅・奴・壤・浪・婁」があるのは「ナ・ラ」の音訳であり、「川・池・沼・原・集落・京・国」などは「ナ・ラ」の意識なのです。

狗奴国の官に狗古智卑狗がいる。古智はコチ・クチと発音し、韓国の地名に骨(コチ)、只(クチ)、串(コチ)などと使われています。骨品制度の血統や家系を意味しており、王族が居住する所の地名として使われています。そこに宗主の居所があるのです。狗古智はククチ・クコチと読みます。韓国語で「菊」のことをクク(kuk)と発音し、「地・池」のことを「チ・ナ」と発音しますので菊池市が「王の居所」といえるのです。

狗奴国はクナ国・カラ国と発音し「王国」の意味です。『広辞苑』で「王座」を引くと「王の座席。玉座。王位」とあるので、熊本の玉名市は「クナ国・カラ国」と発音し「王国」という意味の狗奴国なのです。

邪馬壹国の八女市の南にある玉名市・菊池市が狗奴国であると言えるのです。

古事記・難解文の解釈とその背景 R2.9.15

金田 弘之

伊都の尾羽張神

古事記(黄泉国、国譲)は、「伊都の尾羽張神(書紀は稜威の雄走神)」を記しますが、伊都(稜威)＝天で威力を、尾羽張＝帆張で帆を張った船(帆船)を、そして神＝支配者を意味しますから、「強力な水軍の支配者」と解釈できます。

糸島半島の付け根(福岡県糸島市)にある「神在」は西に唐津湾を臨みます。1800年前は海拔5m付近が汀線ですから、ここに伊都港があり水軍基地になっていたと推定されます。

神在神社(伊斗村)の神功皇后伝承(皇后が立ち寄り紫雲たなびく)や神石(勾玉出土)は古事記(石は伊斗にあり)を裏付けます。新羅渡海の4世紀末、神在神社は港(入海)に面し、地政学的に邪馬台国時代(3世紀)には水軍基地の存在が想定されます。

古事記は、「伊都尾羽張神の子・建御雷男神が出雲の稲佐の小濱に上陸して大国主命と談判し国譲りを強要した」と記します。

稲佐の濱(出雲)では神在祭が行われていますが、出雲大社の祭神・大国主命は西(伊都の神在)を向いて祀られています。

水を逆に塞き上げる

伊都には、「水を逆に塞き上げ」他神(一般の神々)が入れない地域(古事記・国譲り)があると記しています。それでは、「水を逆に塞き上げる」とはどういう意味でしょうか。

古代(1800年ほど前)、糸島半島の付け根付近には水道(海峡)が存在したとされていますが、志登付近に微高地(1~2m)が存在するため、博多(今津)湾と唐津(船越)湾の間は船の直接往来が不可能とする見解(研究)がみられます。

しかしながら志登付近の地勢(地形・地名)を分析すると、必ずしも不可能ではなかったように見えます。

波多江(波のたつ入江)や泊(船が停泊)の地名は海峡の最奥部を示唆し、志登は意志(志)で船を上げる(登)と解釈できます。

当時は稲作技術が進歩し水の管理ができるようになっていましたから、簡単な水門(ドック)で、1~2m程度の船の昇降は可能であったと考えます(スエズ運河やパナマ運河の超ミニ版)。

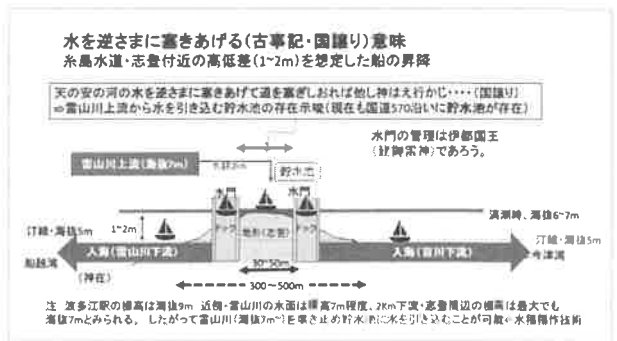
志登付近を流れる雷山川(船越湾へ下る)と盲川(今津湾へ下る)の近接部(数十メートル)には現在も貯水池の存在が認められますが、水門(ドック)の名残のように見えます。

使者・天迦久神は、博多湾方向から「水を逆に塞き上げた」志登の水門(ドック)を通過して神在に來たとみられます。

天照大神が出雲派遣(軍事侵攻)を要請した天尾羽張神(伊都国王)の所在地が神在であることを示しています。

天照大神=卑弥呼(この場合、後継者・台与)とする立場(私見)でみれば、邪馬台国は北部九州に所在していたと考えます。

ちなみに魏志は、伊都国に一大卒があつて「諸国(対馬、壱岐など)を巡察した」としていますから、水軍の存在を示しています。



古代史推論—ニギハヤヒとは何者なのか

竹村 紘一

はじめに

コロナ騒動で歴史関係の例会はその殆どが開催中止や延期となりイベントも先延ばしとなり外出もままならず無聊を託っているのを機に、改めて古代史に関する長年に亘り抱いていた疑問を再確認することとした。

本邦の古代史には非常に謎が多く、先学に学ぶことは多いものの、未だにその謎の多くが解明されていないものが少なくないように思う。邪馬台国の所在地は当然のこととして疑問に思うことをランダムに挙げると以下の通りである。今後、勉強すると共に先達諸氏のご指導を得たいと思う次第である。

- 国譲りの地は葦原中津国とされるが具体的にはどこなのか？
- 葦原中津国と出雲の関係はどう考えればよいのか？
- 国譲りは円満ではなく、大国主と事代主は殺されたのではないのか？
- 出雲大社は大国主の鎮魂のために創建されたのではないのか？
- タケミナカタは本当に諏訪の地に鎮まったのか？
- 天孫降臨の地はどこか(ニギハヤヒは河内に降臨しているが) ニニギが日向というのとは何故か？
- 邪馬台国に対抗した狗奴国の所在地はどこか？

- 邪馬台国は後に東征して大和へ行ったのか？
- 東征は三回(神武・崇神・応神)行われたとされるが、神武東征は無かったとの説もある。
- 仲哀の皇子の忍熊王こそが正統だと思われるが、応神東征は神功皇后の謀反ではないのか？
- 卑弥呼や台与が日本書紀に出て来ないのは何故か？ 大和朝廷の誰かに比定されないのか？ 年代的には崇神天皇の時期となるが
- 徐福と大和朝廷の関わりはあるのか？

本稿ではニギハヤヒについて諸説を踏まえて纏めたのでご一読願えれば思う。

ニギハヤヒの正体とは

日本神話に出て来る他の神もそうであるが、ニギハヤヒも多くの名前を持っていて(記紀やその他の書物で記述が異なることも紛らわしい原因)混同や誤解が生じ易く正しく理解することが難しい神であると思われる。

天照大神の子の天忍穗耳命(天照大神と素戔嗚尊の誓約により生まれたとされる)と高御産巢日神の娘の萬幡豊秋津師比売命が結婚して天火明命と瓊瓊杵尊を産んだとされている。『先代旧事本紀』では、「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」といい天忍穗耳尊の子で瓊瓊杵尊の兄である天火明命と同一神としている。兄ではなく父という記述をした書物もある。また、物部氏、穂積氏、尾張氏、海部氏、熊野国造等の祖神と伝えられている。

ニギハヤヒは天孫族という天照大神の系統で、神の中でも神格が高い神で、しかも、葦原中津国に降臨をしたニギノミコトより先に降臨していたということになるのである。もっと注目されてしかるべき神であると思われる。

また、『播磨国風土記』には、ニギハヤヒは出雲王朝の子孫ともされている。

出雲王朝の祖は、天照大神の弟とされる素戔嗚尊で、少彦名命(『古事記』では神産巢日神の子とされ、『日本書紀』では高皇産靈神の子とされる)の助力を得て葦原中津国の国作りをしたとされる大国主神はその後裔であるとされる。その後、ニギハヤヒは出雲から大和に向かったとも言われている。

他にも、ニギハヤヒこそが太陽神(男神説あり)天照大神であるという説や、ニギハヤヒは始皇帝が不老不死の薬を求めて日本に遣わした徐福と関連するとの興味深い説もある。徐福は先進していた農耕器具等の技術を携え、大勢の若者を引き連れて平原広沢(日本とされる)に着き、文化や稲作を伝え広めたとの説もある。奇説とは思いますが神武天皇に比定する説もある。時代的に合わないように思えるが他の天皇とも考えられるので一考に値すると思っている。

『古事記』では速藝速日命、『日本書紀』では饒速日命、『先代旧事本紀』では饒速日命の名称以外に、別名を天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、天火明命、天照御魂神、天照皇御魂大神、櫛玉命、櫛玉神饒速日命等がある。

『古事記』では、神武天皇の神武東征において大和地方の豪族である長髓彦が推戴した神として描かれる。その当時、大和の鳥見(登美)と呼ばれる地域で、長髓彦という首長とその一族が治めていたが、降臨した天津神であるニギハヤヒに従うことになった。ニギハヤヒは妹の登美夜毘売(三炊屋媛と結婚したので、長髓彦はニギハヤヒの義兄となり後盾となったのである。二人の間に宇摩志麻遲命が生まれた。一旦、敗れた神倭伊波礼毘古命(後の神武天皇)が、紀伊半島を迂回して再度、東征して来た際には、長髓彦は敗れた。『日本書紀』の記述では、金色の鵄が神倭伊波礼毘古命の弓に止まると、その体から発する強烈な光で長髓彦の軍兵たちの目が眩み、東征軍が勝利したとされている。この鵄を「金鵄」と呼び、この伝説が後の金鵄勳章の始まりとなる。

ニギハヤヒは神倭伊波礼毘古命が天照大御神の子孫(玄孫)であることを知り、説得を聞かず、尚も抵抗を続けるナガスネヒコを殺して降ったという。『先代旧事本紀』では神武天皇が紀伊半島を迂回し長髓彦と再び対峙した頃には、ニギハヤヒは既に亡くなっており、宇摩志麻遲命が天孫への帰順を諭しても聞かなかつたため殺したとする。『東日流外三郡誌』(現在は偽書説が定着している)によると、ナガスネヒコは逃れて東北へ落ち延び、後に再起して第八代孝元天皇になったとの話もある。

ニギハヤヒはニギノミコトと兄弟であるから神倭伊波礼毘古命(神武天皇)とは四世代程の差があるので、時代的に合わないと思われる。ニギハヤヒは神武東征の頃には既に死んでいたと考えられるのである。

『日本書紀』によれば、ニギノミコトの降臨に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり、大勢の随行者と共に天磐船に乗って河内国の河上の地に天降り、その後大和国に移ったとされている。『先代旧事本紀』にれば、ニギハヤヒは天照神の命令で、天の磐船に乗り、河内国の川上、枚方の地に至り、私市から生駒山にあるイカルガノミネに天降り、その後、ヤマト国の鳥見の白庭山へ移ったとされている。十種の瑞宝の中の有名なものは「ツツノミタマの剣」と高天原から降臨した天津神であることを証明する「天羽々矢」があった。これらを携えて、ニギハヤヒは河内国に向かう。後の二ニギの降臨の時よりも、随行者の人数(後の二ニギの降臨に随行者

た人もいる)や携えた宝物も規模が大きかった。これと関連してニギハヤヒの降臨は無かったとの説もあるのである。

また、有力な氏族、特に祭祀を司る物部氏の祖神とされていること、神武天皇より先に大和に鎮座していることが神話に明記されていることなど、ニギハヤヒの存在は極めて大きいと思われるのである。大和地方に神武天皇の前に出雲系の王権が存在したことを示すとする説や、大和地方に存在した何らかの勢力と物部氏との間に深い関係があったとする説などもある。

『新撰姓氏録』ではニギハヤヒは、天神(高天原系の神であるが皇統ではない)で、天火明命は天孫(天照大神の直系)とし両者を別の神として神格に差があるように説明しているが疑問もあり私は同格の神であると考えている。元伊勢籠神社の伝承によると、天火明命は日向に天孫降臨した瓊瓊杵尊の兄弟で、丹波に天孫降臨した神だとされている。『先代旧事本紀』によると、ニギハヤヒは元伊勢籠神社の伝承と同じく瓊瓊杵尊の兄弟で、河内に降臨して後に大和に入った神だと記している。両者の記述には、多少の異同はあるものの、多くの共通性があり信頼出来ると思われる。私は、一番早くに大和入りしたとされる古代の大族である物部氏が古代史の鍵を握っていると思われるので、今後は、その祖神とされるニギハヤヒや後裔氏族に焦点を当てて勉強して行きたいと考えている。

卑弥呼＝天照大神説に異論あり!

福島 巖

邪馬台国新聞第10号の記事で内野支部長の特別投稿が載っていますが内容が納得できない点が多々あります。安本先生の前提条件を踏まえて内容を組み立てたものですが次の7項目です。

- ① 魏志倭人伝を基本にしているようですが同じ魏志韓伝には倭国は韓半島南端にある王国だと明記されていて中国人には漢の時代から常識です。日本人が中国や半島の文献に興味があるのは彼らの歴史の流れを知るため、中国人は当時大陸と全く利害関係を持たなかった日本列島内部の話には無関心です。文字のない4～5世紀以前の列島内からの情報が中国に届いているはずはありません。倭人は九州にもいたが倭の国王は日本にいたのではなく半島の宮殿にいた。
- ② 古事記や日本書紀などの日本国内の文献
国内の古文献は8世紀に古代から伝えられて神話をまとめて作られた。これらをできるだけ詳細に解析すれば真の姿が把握できると考えて安本先生の話は展開されているが元資料が玉石混交で全く意味のない解析結果になっている。これらの原典は藤原不比等などの操作によって時代はもちろん重要人物を作り出したり、重要人物を消し去ったりしているのである。仲哀天皇の業績は崇神天皇の、応神天皇は垂仁天皇の業績にしてしまっている。おまけに万世一系の天皇と称して異系列の王に細工を重ねて一本にしてしまっている。
神武系(神武……開化)－架空の大和系(崇神、垂仁)－蘇我系(景行……継体)。
- ③ 大和に大古墳時代を作り上げ大和朝廷を作ったツヌガアラシトの来日時期は垂仁天皇の時(5世紀)とされているがこの時の応神天皇はアラシトの七世でありアラシトは卑弥呼から直接列島に鉄の販売ルートを確認するよう指示され、実際には230年代には来日している。アラシトは鉄を運ぶのに海岸や山中に港の役割をする周豪(掘り)施設を作った。掘った土を山に積み上げたのが古墳に似ていた。高い丘には灯台の役割果たすため銅鏡を設置し、全体の形が前方後円墳に似ていた。この掘り(周豪)を溜池にして使ったのが大和盆地の古墳群であった。
- ④ 古墳について私の研究では最初の大古墳は但馬の和田山に作られた池田古墳でアラシト(天日槍)が作ったもの。彼は和田山町に近い柿坪に王宮を作り夏場はここで、冬場は大和で全体の指揮を執った。円山川には息子の建田背が作った網野銚子山古墳で船を変えて(海洋船から曳船)、260年頃には姫路まで鉄の輸送が始まっている。輸送力強化の2陣：丹後半島～加古川ルートは孫の建諸隅が竹野に明神山古墳を作って始まった。本格的な鉄輸送はこの道が本命になって行われた。日本海側から鉄輸送道が完成した後、大和盆地の唐古環濠集落付近で起きる洪水対策が緊急の課題となり、その対策として息子建田背が丹後から大和三輪地区に呼び出され大型の溜池を作ったのが纏向古墳群であった。たくさんの古墳を作ったが洪水は収まらず孫の建諸隅が水の取り込み位置を三輪側に移す新纏向川を開発し、そこにより規模の大きい箸墓古墳を完成させた。洪水は無くなり新しい川を利用して広い水田地帯が生まれ大和は豊かな先端地域に変換した。これらの古墳群の建設に各地から人が集まったとあるが九州地区からやってきた人はいなかった。またこれらの古墳は卑弥呼などとは全く関係ないアラシト一族によって作られた。
- ⑤ 卑弥呼＝天照大神設定の矛盾
倭国の創立者天照大神は42年金官伽耶に降臨した。彼は伽耶山山麓の高霊にて兄スサノオと共に生まれている。

一方卑弥呼は200年頃の生まれであり出雲の国譲り事件があったあと高霊に戻った出雲のエリート集団が引き起こした倭国大乱を解決した女傑であり民衆に尊敬され100人近い殉葬墓の中に眠っている人物。どの時代でも巫女が祈って国が豊かになり紛争が解決したことなどありえないこと。彼女は高霊の地で鉄を作る事業を起し後の大伽耶発展の基礎を作った人物である。巨大な大伽耶国が無から超大国に発展できたトリガーは卑弥呼が作ったのである。

- ⑥ 現在のように情報にあふれネットで伝わる時代でなく文字もなく、情報のほとんどない時代には資料の解析で時代を構築できない。

例えば九州の地名と大和の地名が似ていることから神武の東征が正という安本説は天照が生まれた伽耶山一帯にある地名が伽耶人の移動先に付けられたもので出雲、吉備、糸島など各地に有力者が移住した所はある。言葉は時代や場所に変化し易く国家が移動したとか卑弥呼の存在の有無と結びつけるには問題があると思う。

- ⑦ 誤りの最も大きいのは海運に関するもの

古代瀬戸内海は手漕ぎ船では航行不可能であったこと。世界有数の難所と専門家は指摘している(古代史の謎は海路で解ける 長野正孝著)。

瀬戸内海は帆船の力と各地に港が整備されて航行できるようになったのが5世紀以降の事。神武とか九州の有力者が東征して国を開いたというのが邪馬台国九州説を唱える人たちの主張であるが瀬戸内海を船で渡る話は8世紀の記紀編集者が頭で考えたこと。倭の五王が中国の皇帝に朝貢したとか倭の軍隊が新羅や百済、高句麗と戦ったという話題はすべて韓半島「大伽耶国」の人達の話であって貧弱な手漕ぎ船でしか渡航できなかった当時、列島から大部隊が進軍した話はなかった。戦いも軍船での戦いではなく陸上に限られていた。

邪馬台国 vs. 狗奴国 ～ 戦争の始まりと終り

山田 昌行

女王国と対立する狗奴国はどこにあったのか

邪馬台国近畿纏向説でも北部九州説でも、後世の大和朝廷への反乱のイメージからか、南九州の熊襲を狗奴国に比定する人が多い。

だが、『魏志』倭人伝より百五十年後に出た『後漢書』倭伝には「自女王国東渡海千余里至拘奴国雖皆倭種而不属女王」とあり、倭人伝の「女王国東渡海千余里復有国皆倭種」に拘奴国を挿入し、前書の「狗奴」を「拘奴」と書いている。また前書の傍国を列挙した最後の「奴国此女王境界所盡其南」に狗奴国があるというのに対して、拘奴国は「女王国東渡海千余里」としている。両書からも、狗奴国も拘奴国も九州本島内ではないことがわかる。

『後漢書』の「拘奴」について、歴史・地理学者の吉田東伍博士は『日韓古史断』(1893年)で「拘奴は河野にして伊予国なり、伊予は西南の旧国にして大族あり、河野という、その初、久努につくる」と述べていることが注目されるが、ここでは『魏志』倭人伝の狗奴国でいく。

狗奴国は、邪馬台国を盟主とする倭国連合のようなくつかの国々の連合のである東倭国の一員で、倭国と海を隔てて対面し、東倭国の瀬戸内海の前進基地であった。また東倭国は素より女王国と不和な男王国と書かれている。さかのぼれば、アマテラス〜ヒミコの倭国系とスサノオ〜ニギハヤヒの東倭系の同族の因縁か。

この時代、倭国の邪馬台国を盟主とする九州・西中国連合と、狗奴国を西のフロンティアとする近畿・瀬戸内連合の東倭国との対立、朝鮮の弁辰からの鉄の輸入ルートの確保および倭国統一に向かって、瀬戸内海東進・西進の拮抗・抗争の状況にあった。

倭国の宗主権争い

なんと、「魏正始元年春正月東倭重譯納貢」という記事が『晋書』本紀の初代皇帝<宣帝紀>にある。正始元年(240)といえ、卑弥呼が景初二(238)年に魏へ朝貢の使節として派遣した難升米らの帰還を送って、梯儻ら魏使一行が魏の公式使節として来倭した年である。不思議なことにこの記事は『魏志』倭人伝には無いのである。

魏としては、倭国朝貢の直後にやって来た東倭の扱いに困惑し、明帝の喪中、新しい幼帝の即位の混乱もあって、東倭の朝貢は認められなかったのであろう。

そこで東倭は、魏から認められた「倭国」の宗主権を武力で奪取しようとして、東倭連合最西端で水運に長けた狗奴国の水軍を組織して、女王卑弥呼の老衰に乗じて女王の居る邪馬台国の都へ侵攻を開始してきた。

卑弥呼は「年已長大」で、後継者も決めていなかったから、魏との外交は能吏の難升米がとりしきっていた。正始八年(247) 狗奴国と相攻撃する状況を帯方郡に載斯等を遣わして説明した。郡の太守は武官の張政等を派遣して、魏帝の詔書と軍旗・黄幢をもたらし難升米に黄幢と檄を与えた。

邪馬台国には組織だった軍隊は無く、近衛兵程度であったろうから苦戦を強いられた。

倭国大乱の回避と東西倭国合一への調停

張政は、東倭が魏へ朝貢したいと郡まで来ていることを聞き知って来たから、狗奴国を無下に扱うことはできず、ただちに停戦のための和議をはかったのであろう。また魏としては、宿敵・呉や諸韓族の反魏の動きを牽制する遠交策として、倭国の政情不安を早く解消したかった。

卑弥呼の死後、男王が立てられたが国中が服さない。互いに誅殺しあい千余人が死んだ。そこで卑弥呼の宗女・臺与、年十三が立てられると国中が平定し、倭国大乱の二の舞は回避された。

東倭国にとってはどういうメリットがあって戦争を回避して停戦したのか。張政の調停でどんなwin-winの和議がなされたのか、『魏志』にも『後漢書』にも何も書かれていないが、和議の内容は、将来の倭国合一を視野に入れた両王家の政略結婚ではなかったか。

張政は檄をもって臺与を励ました。臺与は国が存続できた張政の恩義に感謝して、張政らが帰るのを郡まで送り、さらに魏の都・洛陽にまで使いした。これが何年かは書かれていないが、250年ごろと推定されるので、張政は4年ほど倭国に滞在して東西倭国の和議を主導したことになる。(了)

わが図書を語る

『日本書紀「神代」の真実 ～邪馬台国からヤマト王権への系譜～』

ワニブックスPLUS新書 900円＋税 伊藤 雅文

『日本書紀』はヤマト王権誕生以前の日本についても書き記しています。いわゆる神話といわれるものです。それらはすべて創作とされていますが、本当にそうでしょうか。日本書紀の編纂者たちは最初の二巻も費やして、夢物語を書き連ねたのでしょうか。

私は、天照大神にも、素戔鳴尊にも、瓊瓊杵尊にも、モデルとなった人物がいて、天孫降臨や、出雲の国譲りや、海幸山幸にもモチーフとなった出来事があったと考えました。

本書では、神代の真実の系譜を復元することにより、初代天皇即位以前の日本で何が起きていたのかを解明していきます。そこに邪馬台国はあったのか、そこに卑弥呼はいたのか、も明らかになります。



「安本美典賞」創設のお知らせ

・主旨：

邪馬台国および古代史全般に関する研究で優れた業績を残された研究者を称え、「安本美典賞」を贈呈する。「安本美典賞」の顕彰を通じて、安本先生の研究成果、著作刊行などの業績をより多くの人に知っていただくことを期待する。

・対象：

古代史、邪馬台国を研究している学識研究者、在野の研究者
古代史の解明には特定の情報だけに偏らず、日本の文献、外国の文献や考古学的に裏付けされた事実を考えあわせ、科学的な根拠をもとに総合的、論理的な成果をあげた研究者を対象とする。

・主催：

邪馬台国の会

・選考：

「安本美典賞選考委員会」過去に発表された論文、著作などから選考する。

・授賞式：

受賞者は1名。新聞、雑誌(季刊邪馬台国)、インターネットで公示。

授賞式は毎年1回秋に行なう。第1回目は2021年秋に表彰を予定。

授賞式では賞状および最優秀賞10万円を授与。

後援：朝倉市、梓書院、勉誠出版、歴研(歴史研究会)、全国邪馬台国連絡協議会東京支部、
全国邪馬台国連絡協議会九州支部、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、西日本新聞社、
RKB毎日放送、テレビ西日本、テレQ

・問い合わせ先：

邪馬台国の会 会長・内野 勝弘

事務局：邪馬台国の会ホームページ <http://yamatai.cside.com>